近現代日本 150 年の労働者・民衆の歴史
第三章　世界恐慌～日中戦争開始まで(前半)
第三章前半 Report & Talk まとめ(2019/1-2020/2)

○1 月 27 日(日)プチ労９８「歴史」第 I 期 3 概説—レポーターごうさん
＊2 月 9 日(土)シネマ共謀第 17 回「焼肉ドラゴン」(2018 年)
○2 月 24 日(日)プチ労９９「歴史」ドイツ—レポーターGO さん
＊3 月 9 日(土)シネマ共謀第 18 回「ハンナアーレント」(2013 年)
○3 月 31 日(日)プチ労１００「歴史」ドイツ—レポーターなおこさん
＊4 月 13 日(土)シネマ共謀第 19 回「1945 年の精神」(2013 年)
○4 月 28 日(日)プチ労１０１「歴史」ドイツ—レポーターGO
＊5 月 11 日(土)シネマ共謀第 20 回「わたしは、ダニエル・ブレイク」(2016 年)
○5 月 26 日(日)プチ労１０２「歴史」アメリカ—レポーターゆいさん
＊6 月 8 日(土)シネマ共謀第 21 回「怒りの葡萄」(1940 年公開)
○6 月 30 日(日)プチ労１０３「歴史」アメリカ—レポーターゆいさん
＊7 月 13 日(土)シネマ共謀第 22 回「ラビングー愛という名の二人」(2016 年)
○7 月 28 日(日)プチ労１０４「歴史」満州の概説—レポーターGO
＊8 月 10 日(土)シネマ共謀第 23 回夏休み編「ボヘミアン・ラプソディ」(2018 年)
○8 月 25 日(日)プチ労１０５「歴史」満州 3 節—レポーターみちこさん
＊9 月 14 日(土) シネマ共謀第 24 回「ソ満国境—15 歳の夏」(2015 年公開)
——9 月 29 日プチ労は、亭主腰痛と岸田さん裁判で休止。
○10 月 27 日(日)プチ労１０６「歴史」番外編—「慰安婦」・「徴用工」問題
○11 月 24 日(日)プチ労１０７「歴史」満州 4,5 節—レポーターゆたかさん

＊2020 年 1 月 11 日(土) シネマ共謀第 25 回「1987 - ある闘いの真実」(2018 年公開)
○2020 年 1 月 26 日(日)プチ労１０８「歴史」第三章前半振り返り - レポーターGO
＊2020 年 2 月 8 日(土) シネマ共謀第 26 回「空と風と星の詩人」(2016 年公開)
○2020 年 2 月 23 日(日)プチ労１０９「歴史」満州 6,7 節－レポーターしょうごさん

＜2019-1-27 プチ労 98 まとめ＞
参加者：7 人（+幼児１、乳児１）　中高年：青年＝3：4　地域：それ以外＝5：2
メニュー：インドネシア肉みそ丼、タフゴレンサンバル（厚揚げとトマトの甘辛煮）

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 10 回
◎第一部　ペリー来航～敗戦～戦後革命期（1853 年～1954 年）
第三章　世界大恐慌～日中戦争開始まで　概説 by GO

今回は、第 3 章 1930 年代の草稿概説。MK さんが「歴史」初参加してくれて、「歴史」をどうみていくか、進め方の議論もできた。次回は、第 1 節ドイツで、しょうこさんレポーターの予定。

1. 概説

今日から 1930 年代。お配りした「草稿」前半だけでも 100 頁、第一章・第二章あわせたのと同じ分量に増えた理由も含めて、概説する。

1930 年代は、ナオミクラインが「不気味なほど現代に似ている時代」とも言ったが、欧米資本主義が繁栄を謳歌していた「黄金の 20 年代」から、29 年の世界恐慌を経て一転して貧困と大失業になる。

それとともに、世界的に労働者が立ち上がる階級闘争の時代となるので、日本だけでなく、当時、日本が手本にしたナチスが政権を握るドイツと第二次大戦後、日本を「支配」することになるアメリカをまず、１節ずつ見ることにした。

第一節ドイツでは、現在でもあらためてナチスはどうして生まれたのか、議論がさかんだが、最後のコラムにもあるように、実は、世界最大の反戦勢力でもあるドイツ労働者階級の闘いがナチスの台頭と第二次大戦を止めるのに「アト一歩」だったかも、という視点で、1933 年 1 月ヒトラーが首相就任するまでの流れを中心に見た。

また、最後の「アト一歩」コラムでは、3 月のシネマ共謀で上映する新作映画「ハンナアーレント」も引き合いに出して、キーワードは「労働の尊厳」ではないかと提示してみた。

第二節はアメリカ。世界恐慌を「社会主義的なニューディール政策」で乗り切り、ファシズムとの戦いを自由と民主主義の代表として勝利した」と言われるアメリカだが、実は、「アメリカの民衆史」のハワードジンが言うように、当時、労働者の反乱で「体制崩壊の淵にたっていた」。そして、ヒトラーと同じ 1933 年、3 月に大統領に就任したルーズベルトの「ニューディール」も資本の延命策として、資本代理人ナチスの「兄弟」であり、結局恐慌を乗り切れず戦争で解消

しようとしたという視点で、その中での労働者の闘いの流れを見る。
　もうひとつ、まんなかあたりのコラムにあるように、最近、アメリカで「ナチスの反ユダヤ法のモデルはアメリカの南北戦争以来の人種差別法制だった」ことが論証された。
　アメリカの黒人解放運動指導者のデュボイスは1903年に「20世紀の問題は、皮膚の色による境界線（COLLAR-LINE）の問題」と言ったが、引き続き現代のアフリカが「白人」による収奪の場であるだけでなく、アメリカでは、1930年代を人種差別法のピークとしながら、今のトランプに見られるように、一貫して資本主義が困難に直面すると人種分断が持ち出されている。
　民族と人種の分断は、資本主義の延命のために、1930年代、ドイツとともに日本でも朝鮮・中国民衆の「二級国民化」として用いられたし、今、再燃している。
　第三節は、ドイツ・アメリカを踏まえて、日本の「満州」侵略。朝鮮侵略の矛盾が「満州」侵略を自ずから引き起こしたという入り方だが、その一方、日本国内に蔓延していた「時代の閉塞感」が侵略を支持し、「満州国」、それが唱える「王道楽土」は、社会主義者も含めて一種の「希望」だったともいえる。
　その意味で、現代日本の「時代の閉塞感」からして、「現代の写し鏡ではないか」という視点で、あまりよく知らなかった「満州」をめぐる当時の青年の心情などいろいろ追ってみて分量も増えた。
　また、石原莞爾の「東洋の王道」思想は宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」に同じ国柱会会員として通じるものがあり、さらに、宮崎駿の「風の谷のナウシカ」では、「焦土のなかで王道楽土建設」といわれ、当時の「満州国」承認のための外相演説「日本を焦土にしても満州国」もあり、まったく棄民にされた満州国開拓移民とともに、現代日本の「放射能でフクシマを焦土にしても日本の復興」が連想されるというコラムもおいた。
　そして、「満州国」での国家・資本の実験はまったく失敗であるにもかかわらず、アベの祖父岸信介らが何の反省もなく、その「統制の体制」を第二次大戦後に引き継いで、同じく朝鮮戦争を踏み台にして「高度成長」を仕掛けた、という現代に連続する点を見る。
　しかし、その上で、結局「満州国」を崩壊させたのは民衆の抵抗だったという視点で、抗日武装闘争と「満州の兵站基地」とされた朝鮮での民衆の闘いを見る。
　特に、現代でも課題である「抵抗の統一戦線」結成については、「満州」の抗日武装闘争では、ドイツでもアメリカでも日本でも闘いを混乱させたスターリンのコミンテルンの指示からは自立して形成された点でみるべきものがある。
　一方、朝鮮では、日本の激しい武力弾圧のなかでも文字通り「地下化」しながら戦いぬかれ、第二次大戦後、アメリカの「反共政策」でつぶされるまで、全土

にわたる民衆自治政府を結成する動力となった労働運動と農民運動の革命的な闘いを見るが、そのなかでも解散せざるを得なかった民族解放統一戦線「新幹会」の顛末に現代に問いかけるものがある。

ここまでが、第三章 1930 年代前半で、今年夏くらいまでかけてやれたらと思う。

「草稿」本文はないが、後半をコメントすると、

第四節は日本の労働運動。1930 年代の労働運動は「すべてを押し流す満州事変が勃発し、労働組合が一斉に右傾化して敗北し、日中戦争とともに始まる国家総動員体制で壊滅する」と言われるが、まさに「労働の尊厳」を奪う非正規化が進む現代からあらためて見るべきことは、当時の労働運動が「労働の尊厳」の奪還を幅広く追求したことではないかという視点で追っている。

20 年代、戦闘的な労働運動をリードした評議会を引き継いだ全協の運動を軸としながら、当時の闘いの 2 大主力となった遊郭の女性も含む女性労働者と在日朝鮮人の創造的な運動を中心に詳しく追ってみたので分量も増えた。

第五節は農民運動。個人的に大学の専攻や会社の仕事を通じた農業・農民への関心もあり、割と詳しく追った。その視点は「どうして農民運動は労働運動より一貫して“左派”だったのか？」。

農民運動は、「左派」として「地主支配体制と妥協せず、天皇制国家とも果敢に」闘った結果、第二次大戦後の農地改革もアメリカに与えられたものではなく、自らその基盤を勝ち取っていったといえる。

あわせて、その過程を跡付けながら、農民にとって土地とは何か、彼らの掲げた「土地を農民へ」というスローガンの意味を考えてみた。

それらを踏まえて、当時、労働運動はより農民運動から学ぶべきことがあったのではないか。それは、さらに、現代、農業に関連しても「自分なりの生活と労働を新たな協働で創ろうする青年たちも多くいる」なかでは、新たな「労農連帯の課題」を問いかけているのではないか、と提示してみた。

こうしたことを通じて、戦争・原発・格差拡大、天皇制、民族と階級の問題、等、これからの日本どうなる、ということ、それから、今、みんなは、そして、「満足している」ともいわれる若者は、どう立ち上がるのか、等、考えていけたらと思う。

2. Talk

ＭＫ：「だいぶ長くなる」ようだが、予定しているという第二部（敗戦後「高度成長期」～1980 年代末：ソ連崩壊・55 年体制の終焉）、第三部（その後から現在）、どのへんまでやれるのか？

ＧＯ：「草稿」を書いているうちに長くなって、確かに途中で息切れしそうな気もする。「歴史学のプロ」ではないが、「歴史」として見れるのは一定時期をお

いて評価がさだまってからということもあるようだから、つい昨日までの直近はもともと無理かも。

ＭＫ：今を問い返すことが主眼ならば、やり方としては、「戦前」をもう少し簡潔にして、敗戦後から 80 年代末、つまり、今の「平成」が始まる前までを中心にして、そこにどう「戦前」が入り込んでいるのか、見ていくという形もある。

ＧＯ：そういうやり方もあると思うが、僕をはじめ、日本の歴史といっても知らないことが多いのと、書いていると面白いことが多いので、それをみなさんに或る程度丁寧に伝えたいので、こういう積み上げしかないかなと思う。

ＭＧ：面白いのでこのままやっていくのでいいと思う。ただ、1980 年代末までは是非やりたい。

ＧＯ：そうそう、「平成になる」からというより、「５５年体制崩壊」と昭和天皇の死去と、それとソ連崩壊が奇しくも重なる画期ともいえるので、そこまでは頑張りますか。

ＭＫ：ところで、初めての参加なので、第一部を「ペリー来航」から始めた意味は？

ＧＯ：アベなどの好きないわゆる「明治維新」は「武士のクーデター」でしかなく、結果的には大きな社会変革だったが、その動力は、もう少し前から続く農民の蜂起。そうはいっても、あまり前からでは手に余るので、ペリー来航が、蒸気機関車模型と有線電信器という幕府への献上品を見ても、日本が欧米資本主義に触れる出発点として適当かなと。

ＭＫ：そう、資本主義の開始だったと思う。そういう意味で、近現代の歴史を資本主義の推移ということを軸にするなら、最近のベストセラー「サピエンス全史」は是非参考にすべきだと思う。「資本主義がどうして続くのか」、あの本でわかった気がする。

ＧＯ：ＮＨＫの概説ドキュメンタリーを見て「あまり面白くないかな」と思ったが、あらためて取り寄せてみてみる。

ＹＫ：ところで、1930 年代、日本は「二級国民」をつくったというが、どういう風に？

ＧＯ：朝鮮の統治政策、「満州国」の法制などがそう。さらに言えば、「日本人は勤勉なのに貧しい、朝鮮人・中国人は働いていない。だから我々が行ってやるのだ」と侵略と国内の格差の正当化のために「まじめに働かない二級国民」が刷り込まれた。それが今も生きていて、「日本人は勤勉。働かないで生活保護もらうのはとんでもない」という意識も強い。

ちなみに、「自分なりの尊厳のある生活と労働」ということにも関連するが、最近の「精神障害者雇用水増し」に関する福祉労働界からの「とにかく雇用」という動きに対して、精神病者会として闘っているエバッチが、重たい障害者３０

万人を余計に苦しくするとして、パラリンピック反対とともに「障害者の働かない権利」をあらためて打ち出そうとしている。
　MG：プチ労でも以前「働かない権利」という議論をしたことがある。

以上

＜2019-2-24 プチ労 99 まとめ＞

参加者：6 人　中高年：青年＝4：2　地域：それ以外＝4：2
メニュー：春の穴子ちらし、菜花のおひたし

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 11 回
◎第一部　ペリー来航～敗戦～戦後革命期（1853 年～1954 年）
第三章　世界大恐慌～日中戦争開始まで
（1）世界最大の反戦勢力ドイツ労働者階級と資本代理人ナチスの闘い（レポーターGO）　　小劇場「あと一歩だったかも！？」

1.　Report
　子連れしょうこさんがレポーター予定だったが、こども発熱で代理。
　「現代と不気味なほどよく似ている」ともいわれる 1930 年代のショッパナがドイツ。
それは、この時期、後で見るように「満州事変」から戦争に突入していった日本がお手本にしたのがナチスだったということと、世界恐慌を契機に、世界中で闘われた労働者と資本の階級闘争のなかでも、最も劇的に闘われ、その勝利が期待されたのがドイツ労働者のナチスとの闘いだったということ、から。
　1930 年から 1933 年の短期間の劇的な闘い。なので、「草稿」をあらためて要約して、別紙―小劇場シナリオ風の年表で説明する。
　演目は「あと一歩だったかも！？」。労働者階級があと一歩で勝利したかもしれないという意味。資本主義国最大に組織された労働者階級は、果敢に闘いながら、どうして負けたのか。

第一次大戦が終わる 1918 年から世界恐慌までが前史で、プロローグ「潰えた 1923 年の革命」。世界恐慌を経て、1932 年 6 月までが、第一幕「大統領による憲法の破壊」。その後、1933 年 1 月ヒトラーが首相に就任するまでが、第二幕前半「労働者とナチスの激闘」と劇中劇①「激論つづく労働者街」、②「ナチスに入った青年」を挟んで第二幕後半「ナチス後退！」。そして、やっと首相に指名

されたヒトラーが矢継ぎ早に施策を打ち出した 1933 年が、第三幕「資本の代理人になったナチス」。その後の反ユダヤ法制定から戦争突入が、エピローグ「虐殺と戦争へ」。

主役はドイツ労働者階級とナチス。脇役は、労働者階級には、資本主義国最大の社会民主党と共産党、そして、スターリンのコミンテルン。
ヒトラーのナチスには、資本・軍部・右翼とともに、「世界一民主的なワイマール憲法」を壊す大統領ヒンデンブルグとヒトラーに投票した人々。
なお、年表の右の欄にあるのは、ナチスがこだわった選挙の得票数の推移等。

別紙：年表―“ドイツ労働者とナチスの闘い”小劇場「あと一歩だったかも！？」
●プロローグ「潰えた 1923 年の革命」
1918 年 11 月、ロシア革命に続いて労働者と兵士によるドイツ革命がおこり、皇帝はオランダに亡命し第一次大戦を終わらせる。「労働者の党」を標榜する社会民主党が政権をとり、資本と仲良くやる路線をとりながらも、「世界一民主的」なワイマール憲法を定めた。
世界初の 20 歳以上男女全員に選挙権、労働者の団結権・団体交渉権、政党設立の自由などを保障した。一方、大統領には「皇帝が復活しないように」と首相任免権・国会解散権・憲法停止権など非常大権が与えられた。
しかし、「第一次大戦は資本の分捕り合戦」をまさに反映したベルサイユ条約で、全植民地・領土の 1 割・商船の 9 割・鉄鋼業の 7 割を分捕られ、税収の十数年分の賠償金を課されたドイツの経済は混乱し貧困が蔓延する。
このなかで、党員 126 万人の社民党に対して、資本主義国共産党最大の党員 40 万人というドイツ統一共産党が結成される。ナチス（国家社会主義労働者党）も結成されるが党員 3 千人だった。

1923 年には、賠償金支払いを求めてフランスがルール地方を占領し、数か月で通貨価値が 1 千万分の 1 に下落し、「パンが 1 兆マルク」などのハイパーインフレになり大混乱。
8 割の労働者が社民党に見切りをつけて共産党を支持し、ベルリンでの 300 万人のゼネストをはじめ蜂起し、ドイツ革命と同じく評議会政府を各地でつくった。
しかし、スターリンの率いる各国共産党の本部コミンテルンに「ドイツ労働者はまだ脆弱。社民との連携を維持せよ」と指示を受けたドイツ共産党は、「革命を待つ」労働者に何らの指示を出さずに、再度の革命は潰える。

このドサクサにナチスは武装クーデターを企てるが、労働者とともに鎮圧され、これ以後、選挙戦術に切り替える。
これを見ていたアメリカ資本は、翌年、「ドーズプラン」という巨額な資金供与を行い、ドイツ資本と経済は「相対的安定期」を迎える。
このなかで、1925 年、社民党エーベルトの死去にともなう大統領選挙が行われ、出馬にあたってオランダにいる元皇帝にお伺いを立てに行ったほど「皇帝復古主義者」で皇帝の参謀総長だったヒンデンブルグが、軍部と右翼、そして弱小ナチスの支持で当選する。

これには、民衆の「敗戦で傷つけられたドイツの誇り」という意識も影響していた。

その後、1928 年の総選挙（投票率 75.6%）には、ナチスが総力をあげて取り組むが得票は 81 万票（得票率 2.6%）。対して、敗戦後から一貫して議会第一党を維持する社民党は、100 万票伸ばして 800 万票（得票率 30.0%）で政権に返り咲く。
共産党は 330 万票（得票率 10.6%）で、ナチスをあなどり、それどころか、同年のコミンテルン第六回大会で、スターリンが、前年に中国で蒋介石のクーデターに苦杯を飲まされ、共産党と国民党との合作を解消したことで、一転して決定した、“社民党が第一の敵”という「社会ファシズム論」を積極的に支持し、反対する党員を除名した。

社民党と連携して労働者の闘いと要求を抑え込んだ共産党の敵はナチスより社民党になった。

●第一幕「大統領による憲法の破壊」

しかし、労働者は、1929 年、世界恐慌を契機とした資本の賃下げ、解雇に対して再び激しく闘い始める。
この時、ドイツ労働者 2 千万人のうち、600 万人が労働組合員。アメリカをしのぐ資本主義国最大の組織率。日本は労働者 1 千万人のうち労働組合員は 30 万人程度だった。
ドイツ 600 万人労働組合員のうち、社民党系は 490 万人。それに対して共産党系は 31 万人で党員数より少なく、労働者の日常の権利を守る闘争を重視していなかった。

各地でうち続く激しいストに対して、1930 年、大統領ヒンデンブルグは、資本の要望を受けて、初の非常大権を行使して、社民党首相を更迭しカトリック系のブリューニングを首相に任命。ワイマール憲法の破壊を開始した。

首相ブリューゲルが「労働者は資本の賃下げに合意せよ」という命令を法制化しようとして国会に否決されると、ヒンデンブルグは国会を解散し議会を否定。

そして、実施された 1930 年 9 月の総選挙（投票率 82.0%）で、突然ナチスが第二党に躍進する。得票は、ナチスが前回の 8 倍の 640 万票（得票率 18.3%）、社民党は前回比 100 万票減の 700 万票（得票率 24.5%）、共産党は前回比 130 万票増の 460 万票（得票率 13.1%）。

ナチスの躍進は、それまで「金欲し気で与太者のやぼったい集団」とナチスを見ていた資本が、盛り上がる労働者の抵抗を抑えるために金を出し始めたことと、ナチスの選挙アピール「平時（戦争はもうしない）のささやかな幸せ」が効を奏したことによる。

労働者は、再び、大半の労働争議で資本との妥協を指示する社民党から共産党に移りはじめた。

しかし、共産党は、“第一の敵”社民党をつぶすために、なんとナチスと共闘を図る。

ナチスは、第二党になった勢いで、弱腰の社民党を追い詰めるために、社民党の州レベルの強力な地盤で全国の 3/5 の地域を占めるプロイセン州の議会解散投票を提起する。これに共産党は「赤色投票」だとして賛成。しかし、労働者がそっぽを向いて失敗する。

そんななかで、1932 年、任期を迎えたヒンデンブルグは、今度は社民党の支持で 1940 万票を得て再選する。一方、資本・軍部・右翼に支持されたヒトラーも出馬し、1340 万票を獲得。その勢いで、任期を迎えたプロイセン州議会選挙で、ナチスは第一党になる。

ここで、ヒトラー嫌いのヒンデンブルグは、自らの権力を誇示するために、またも非常大権を発動し、1932 年 6 月、首相をブリューニングから、なんとまったく議会には基盤のない貴族パーペンに交代させる。

さらに、ヒンデンブルグは、国会を解散する一方、ブリューニングが発令していた「ナチス突撃隊・親衛隊解散命令」について、ナチスをなだめるために撤回する。

大統領がワイマール憲法体制を破壊した。

そして、労働者は闘い続けているのに、社民党が妥協を、共産党は策動を続けるなかで、ナチスが台頭した。

●第二幕前半「労働者とナチスの激闘」

しかし、資本と野合を始め襲い掛かかってくるナチスに対して労働者は激闘を開始する。

1932 年 6 月だけで、「解散命令」撤回で調子に乗って労働者に襲い掛かるナチス突撃隊・親衛隊との市街戦は 461 件に及んだ。

その頂点は、7 月 17 日、ハンブルグで戦闘服のナチス 1 万 3 千人が労働者街アルトナを襲撃し、労働者が石や植木鉢で応戦。出動した警官隊の発砲で労働者 18 人が死亡した「アルトナの血の日曜日」。

直後の 20 日、ヒンデンブルグとパーペン政府は、大統領非常大権を発動し、「この事件の責任者」として、プロイセン政府社民党閣僚を罷免し、州政府を連邦政府の直轄とした。

これを阻止するために、全国の労働者は、「20 日の夜一晩中」、ゼネスト指令を待ったが、どこからも指令は来なかった。

ジャーナリストが当時の情景を伝えている。

「憤激の嵐が大衆を貫いた。一つの工場も封鎖せず、大衆に計り知れない落胆をもたらした。」

そして、迎えた 7 月 31 日総選挙（投票率 84.1%）。ナチスが前回倍増を超える 1375 万票を得て（得票率 37.3%）社民党を抜いて第一党。しかし、社民党、共産党も前回より得票を伸ばし、社民党は前回比 96 万票増の 796 万票（得票率 21.6%）、共産党は前回比 70 万票増の 528 万票（得票率 14.3%）で、社共合わせれば、まだ、ナチスと拮抗していた。

ナチスは、大躍進とはいえ、過半数は取れず、政権をとれなかった。

●劇中劇①「激論つづく労働者街」（「草稿」第三章 16 頁—コラム「労働者街、つづく労働者の激論」抜粋。）

この総選挙の翌日の情景を描いているのが、クラウス・コルドンの青少年向け小説「ベルリン 1933」の第一章。

ハンスという 15 歳の少年工とその労働者家族が主人公。ベルリン市内北部、総合電機会社 AEG（アーエーゲー）の工場に隣接する労働者街ヴエディング地区の安アパートの 4 階に住むゲープハルト一家。AEG は、アメリカ GE とも資本提携するドイツを代表する独占資本のひとつ。
典型的な労働者アパートは、屋根裏部屋のある 4 階建て。トイレは 1 階だけですぐ詰まる。風呂なし。狭く夫婦のベッドしかなく、ハンスは姉とともに屋根裏部屋に住んでいた。ガスはあるが、配線費用が高いので電気がない家も多く、ゲープハルト家も 2 年前に電気を引いたばかり。食事は肉はめったになく、肉なしスープ、オートミール、パンにラードと塩だけの時も。

ハンスは AEG 倉庫係見習いにやっとありついたばかり。
父ルディは左官労働者だったが第一次大戦で“ドイツ製品の手榴弾”で片腕をなくし低賃金の守衛。共産党創立から党員で労働者地区のリーダーだったが、1928 年「社会ファシズム論」を批判し除名された。
母マリーは家計のために重機械工場で負担の多い仕事を続け、父とは異なり共産党員も続けている。
兄ヘレも疑問はもちながら「党を割ってはしようがない」と熱心な共産党員を続けており、AEG で知り合った妻ユッタと結婚し同様な安アパートに別居している。しかし、最近二人とも解雇され生活はより苦しい。
姉マルタは、「こんな生活から抜け出したい」と父ルディの「事務員なんて自分の切り売り。工場労働者は魂を売っていない」という反対を押し切ってタイピストをしている。

総選挙翌日、ハンスが職場で選挙結果に意気のあがる突撃隊の青年たちにこづかれながら家に帰ると、みんなで選挙結果と政治の議論をしていた。
ヘレ夫婦と一緒に来ていた友人で党の代弁者のような共産党員エデが言う。「ナチの躍進は一時的。どうしようもない小市民が投票しているだけ。ナチス暴露の宣伝で一発だ」
父ルディが手を振って「宣伝？共産党はお手上げと言え！社民党と手を組んで闘うしかない」
エデは「共産党だって組みたいんだ。“社会ファシズム”の社民指導部じゃなくて、それに操られている平の党員と」
。。。
ルディ「なにも社民党と結婚することはない。しばらく一緒に行進すればいい。ナチが消えればまた別の道をいけばいい。」
エデが言い返す。「社民党の方がずっと危険。ナチはわかりやすい。社民党は

資本家の味方をしているのに労働者の政党のふりだ。労働者大衆の権利を代表しているのは共産党だけだ。」
　ルディ「大衆は君たちの味方じゃない。今回の票を見ろ。共産党がいう革命を望んでないんだ。大衆は、体制の崩壊と暴力。それを考えただけで恐れを抱くんだ。さらに、共産党は意見を言う連中を次々と追い出した。カールとローザも背を向けるよ。議論をさせない。命令ばかりだ。」ヘレも言う。「出すのは答えばかり。僕たちに一度も問いかけない。」

●劇中劇②「ナチスに入った青年」（「草稿」第三章 18 頁）

　議論の後、ハンスが屋根裏部屋に行くと、マルタが帰ってきて言った。
　「ギュンターがナチス突撃隊に入隊したわ」ヘレの友人ギュンターとマルタは付き合っていた。驚いたハンスは「それでいいのか？」
　マルタは「私もギュンターも出世したいのよ。ギュンターの上司も突撃隊で、彼を主任代理にするって。私の上司も突撃隊。」
　さらにマルタは続けた。「年取ってまで、1 階のトイレまで降りていきたい？社民党は口先ばかりで共産党はできっこない御託ばかり。私たちの望んでいるのはささやかな幸福。母さんの人生はなに？」

●第二幕後半「ナチス後退！」

　　1932 年 7 月の総選挙結果を見た資本の「この際、徹底的に労働者をつぶせ」という意向を受けて、パーペン政府は、9 月、「労働組合の職業身分的な労働者代表への変更」「協定賃金解体」「雇用増加企業の賃下げ容認」というパーペンプログラム（経済振興緊急令）」を発令。労働組合の解体宣言だった。

　しかし、なんとこれに第一党ナチスは反対し、またもや国会解散・11 月総選挙となる。
　労働者は闘い続け、9 月、10 月で金属・繊維労働者など全国でスト 477 件。
　11 月総選挙直前には、大幅賃下げに対して、社民党は妥協を指示したが、ベルリンの交通労働者 2 万人がスト。総選挙をはさんで 5 日間、首都の交通はすべてストップ。
　なんと、これにもナチスは共産党に並んで参加。
　その最中で総選挙（投票率 80.6%）。結果は、ナチスが第一党を維持したものの後退し、前回比 200 万票減の 1174 万票（得票率 33.1%）。社民党は前回比 70 万票減の 725 万票（得票率 20.4%）に対して、共産党は前回比 70 万票増の最高

得票 598 万票（得票率 16.9%）。
　労働者の闘いで、社共あわせて得票率 37.3%と、再びナチスを上回った。

　ナチスが、労組を解体するペーペンプログラムに反対し、ストに参加したのは、「1932 年 7 月総選挙で過半数を取れなかったのは労働者への浸透不足」と判断したからだが、それを見た資本が引いた。
　これに焦ったヒトラーは、11 月総選挙直後に、ドイツ西部工業地帯など大資本と会談し、「社共根絶・労組解散・大規模軍備で景気回復・ベルサイユ条約破棄」を確約して、正式に「資本代理人」に就任する。

　一方、当時、600 万人にものぼっていた失業者の多くは、現場の社民党員・共産党員とともに先頭に立って闘っていた。残りの失業者もナチスの隊列にはあまりいなかった。

●第三幕「資本の代理人となったナチス」
　1933 年 1 月、ヒンデンブルグはついにヒトラーを首相に任命する。ヒトラーは過半数を取るために、まず国会を解散し総選挙を実施する。
　3 月、「ワイマール憲法最後の選挙」。投票率は前回比＋8.0%と急増し過去最高の 88.7%になり、ナチス得票は前回比 550 万票増の 1728 万票。若い女性もヒトラーのブロマイド写真を競って買うという「アイドル化」がここから進んだ。
　それでも、ナチス得票率は 43.9%と過半数に達せず、総選挙直後に、ヒトラーは、引き続き 500 万票を獲得した共産党を非合法化して、議席数を減らして過半数を確保した。
　その上で、ヒトラーに 4 年間の独裁権を与える「全権委任法」を社民党の反対のみで可決成立。その直後、引き続き「憲法と議会で闘う」と言っていた社民党の活動を禁止。

　一方、ヒトラーは、「産業合理化計画に取り組み、1933 年から 2 年間で、600 万人の失業者を 200 万人減少させた」と豪語した。
　しかし、実際には、ヒトラーが資本と協議した雇用増加策は、現代と同様の非正規化であり、賃金を抑制することだった。さらに、無給の労働奉仕団を拡充する一方、「労働力供給削減策」として、女性労働者には「家事手伝い」を奨励し、アベと同じ統計操作も含めて「失業者 200 万人減」。

　そして、「完全雇用」を宣言するのは、軍需を拡大し、第二次大戦を開始する 1939 年。

●エピローグ「虐殺と戦争へ」

　武装クーデターの失敗以来、「ワイマール憲法の議会制民主主義を守る」として、ひたすら選挙で「平時のささやかな幸せ」、すなわち「平和とパンと仕事」を謳ってきたナチスが、実際にユダヤ人排除と戦争を始めるのはこれ以降である。
　アメリカの人種差別法制をモデルにした「反ユダヤ法」を制定するのは 1935 年。
　そして、1936 年から武力侵攻を開始。

　労働者の「パン」は増えないままに、「仕事」が戦争で増え「平和」が消えた。一方、資本はもうけを増やしていった。

Talk

GO : 社民党、共産党を支持する労働者が、「あと一歩」力を合わせて闘えば、ナチスを阻止できたかもしれないと思う。その「あと一歩」は何だったのか。スターリン、コミンテルン、社民党・共産党幹部が「悪い」ということだけでなく、次回も含めて考えていければと思う。
Yi : 世界恐慌とかから、ドイツの民衆が一斉にナチスを支持していったのかと思っていたが、こんなに労働者が頑張っていたということは知らなかった。労働者たちが大きな対抗勢力だったんだ。
Yk : ナチスの言った「平時のささやかな幸せ」って、アベの言う「自己責任」と同じだ。今、みんな、世界の平和とかよりも、わりと、自分のことばかりを考えている？
GO : そうかもしれない！　逆に言えば、「ナチスにあまり考えていない民衆が熱狂した」というより、「自分の幸せを考える人が支持した」。それに対して、失業者も含めて「労働組合で自分“たち”のことを自分“たち”で決めよう」という人たちが、「あと一歩」で負けた。
Nk : ひどい貧困の状態があったと思う。「アパートには 1 階にしかトイレがなく、風呂も電気もなく、食事もひどい」という話がでてきたが、今、読んでいる黒人詩人のラングストン・ヒューズの自伝に、当時のドイツを訪問した時の「キャラメルひと箱で売春する女性」の話も出てくる。
GO : ハンスの友人「ちびのルツ」がナチスに入ったのも「突撃隊の事務所に行けばいつでもスープが飲めるから」だった。

YS：ナチスを支持した民衆と労働者と、ほんとの共通の敵は資本だった。
GO：そう。「スープ」のための資金を出したのが資本だった。

　次回（3 月 31 日プチ労 No.100）は、なおこさんとの共同レポーターで、ドイツのところの最後に付けたコラム「ナチスに抗したドイツ労働者階級の「あと一歩」—労働の尊厳」（「草稿」第三章 25 頁）をテキストにして、もう少し議論したい。
　その前の 3 月 9 日シネマ共謀で上映する映画「ハンナアーレント」は、ナチスの罪は「凡庸な悪」、それはナチスに熱狂した人にも共通する「人間の思考停止の罪」を訴え、一種の通説になっているが、どうしてそうなったのかを考える意味でも、見てない方は見てほしい。

　あと、本日の付録に、前回、MK さんが話題にしたベストセラー「サピエンス全史」の感想「資本主義はつづくのか」を付けたので、MK さんが言いたかったことに迫れているかどうかはわからないが、どこかで議論できたらと思う。
以上

＜2019-3-31 プチ労 100 まとめ＞
参加者：6 人（そのほか、Y さんのよびかけで近所の大学の「留年愛好会」の T さんがプチ労後の懇談に初参加）　中高年：青年＝4：2　地域：それ以外＝5：1
メニュー：沖縄タコライス、ナスの黒糖味噌煮

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 12 回
◎第一部　ペリー来航～敗戦～戦後革命期（1853 年～1954 年）
第三章　世界大恐慌～日中戦争開始まで
（１）世界最大の反戦勢力ドイツ労働者階級と資本代理人ナチスの闘い
コラム/ナチスに抗したドイツ労働者階級の「あと一歩」—労働の尊厳/（「草稿」25 頁）
　レポーターなおこさん

　前回見たドイツ労働者階級の「あと一歩」が何だったのか。2 月の沖縄県民投票やオリンピック返上署名運動や政府の意識調査の分析を踏まえて、現代日本に引き寄せて考えてみた。
レポーターのわかりやすい整理もあって、面白い議論になったと思う。

我々は、ナチスを作った「自分のことしか考えない大衆」なのか、「自分たちで自分たちのことを決める PEOPLE」なのか。（レポートなおこさん）

別紙：手書きレジメ

N：ナチス戦犯アイヒマン裁判のレポートで騒然とした議論を起こしたハンナ・アーレントは、「ナチスは、自分のことしか考えないことと裏腹に自分の利益がどこにあるかわからない大衆が作った」（「草稿」27 頁）と言ったが、その“大衆”は、今の日本に似ているかも。しかし、2 月の県民投票で沖縄の“大衆”は辺野古基地建設を拒否した。

付録 1：2.24 沖縄県民投票記事（東京新聞「こちら特報部“若者の選択”」）

記事によれば、「名護市では、昨年、政権が推す市長が当選後、有料ゴミの値段が安くなり、保育も無料化された」から賛成という人がいる一方、「おじい、おばあが子孫の世代に基地造らせたらあかんというから反対。この町で娘を育てていくから」という「歴史を考え、自分たちのことを考える」23 歳のパパがいた。

N：そして、アーレントも「資本主義の発展が、《労働》の優位をもたらし、《仕事》や《活動》の人間的意味を失わせ、大衆を生み出した」（「草稿」28 頁）と言っているが、沖縄“大衆”も労働者。コラムでは「ドイツ労働者階級の“あと一歩”は、今も、まさに奪われている“労働の尊厳”を見据え、それを取り戻す努力をもっとすることだったのではないか」（「草稿」26 頁）と書いているが、その「労働の尊厳」って何なのか。

アーレントは「アイヒマンは、ユダヤ人虐殺を実務的に処理したフツーの人」と言うが、これは、オリンピック返上署名運動でやりあっているオリンピック組織委員会の総務課長とかぶる。“自分は仕事をしているだけ。上からの指示に従っているだけ”。

一方、3.11 反原発福島行動で聞いた広島の教師倉澤さんの話は、教師の労働の尊厳を示していたと思う。

「復興庁の嘘だらけの“放射能のホント”というパンフを小学生に配るのをやめた。職員室で、他の先生たちが理由を説明しろというので、NAZEN の仲間から聞いたことをもとに 10 分間にわたって拒否を表明したら、教頭が共鳴して回収した。」

N :「あと一歩」どうすれば勝てたのか。それは、労働の尊厳をとり戻すために“倒すべきは資本、その代理人のナチス”という原点に戻るべきだった。そして、それを階級として共有すべきだった。コラムにあるように、イギリス労働者階級は、第二次大戦末期に歴史上はじめて、イギリスで“PEOPLE”と呼ばれるようになったらしい。それは、彼らが政党などに頼らずに「自分たちのために闘う者は自分たちしかいない」ことを共有したまとまりと存在感を示したから。(「草稿」30 頁)
G:その前史には、国民 4 人に一人が参加した 1926 年のゼネストの経験があり、第二次大戦で、首相チャーチルの功績として映画にもなったが、ナチスがイギリス占領の一歩手前まで迫ったダンケルクからの撤退作戦を労働者・漁師が大量の漁船で成功させた。
そして、1945 年には、チャーチルを追い落として労働党を押し上げ、世界のモデルとなった NHS など社会保障政策を実現させた。(これを描いたケン・ローチ監督のドキュメンタリー映画「1945 年の精神」を 4 月 13 日シネマ共謀第 19 回で上映予定)
Mg :「草稿」に、ドイツ社民党や共産党が、選挙を意識して、「混乱を招く」ゼネストを指示しないなかで、ハンスなど労働者たちが盛んに議論するところがあるが(「草稿」16 頁)、「政党を自分たちに取り戻す必要」があったと思う。
今、再開発反対運動に関わっていても同じ。反対を表明している政党も基本的に“議会主義”。住民投票などには耳を貸そうとしない。
Y : 自分の区でも同じ。
N : 目黒では、防衛研究所に戦争のための「国際協力センター」建設反対が盛り上がった時に、今は立憲民主党の議員が出てきて「住民運動はそれ以上やらないで。あとはまかせて」と言ったが何もしなかった。

現代日本の意識調査「ここ 10 年、過去最大の個人志向と満足度」の意味(レポート GO)

G : 我々は「大衆」なのか「PEOPLE」なのか。
ハンスたちの議論のなかでは、ヘレが「共産党は僕らに何も問いかけないし、議論させない」と言ったが、「政党を取り戻す」ためにも、「自分だけ」の大衆から「自分たち」の PEOPLE へ向けては、自分たちの問題を共有する「議論=Talk」が必要。
しかし、以前、プチ労では、「SNS で“いいね”が 100 以上来ていたのが、原発について投稿すると何も来ない」とか「自分の周りの人は“議論”を怖がる。野坂昭

如のアニメ“ほたるの墓”も見れないと言う」とか言う意見が出ていた。
そうした現代日本を俯瞰する意味で、古市憲寿「絶望の国の幸福な若者たち（2011 年）」が使った内閣府の「社会意識」と「国民生活」の世論調査の「その後」を見てみた。

付録 2：現代日本の「意識」2019～古市氏の「世論調査」のその後

図 1 の選挙投票率が、5 割を切るところまで下がっているのはご存知のとおり。ナチスの時の選挙が投票率 8 割台だったのとは大きく違う。ただ、低投票率は、よく言われる「20 代のせい」ではなく、長期の推移をみれば、20 代も各年代も同じ動き。

そのうえで、強烈だったのが、昨年調査で、図 2 の「個人志向」、図 3 の「現在の生活への満足度」ともに、約半世紀にわたる調査で過去最大になったこと。

古市氏は 2010 年までの調査を見て「社会志向が結構高い」としていたが、2011 年から一転、「社会志向」が急減し「個人志向」が急増。「満足度」は、2008 年から急増し「不満度」との差も過去最大になっている。
一同：シーン
Mm：うーん、最近の世相をよく示しているように思う。
G：一方、図 4「現在の生活の不安度」を見ると、これは、「満足」と裏腹に高い水準。古市氏によれば、他の調査で、「社会への不満」はさらに高い。そして、図 5「愛国心」は、アベなどが高めようと頑張っているが微増。また、他の調査での「国のために戦うか」という問には、他国に比べて圧倒的に「戦う」は少ない。
我々は何者なのか。
N：過去最大の「個人志向」と「満足度」は衝撃。だけど、何か納得する。2011 年以降盛り上がった反原発デモで思ったのは、確かに個人での参加が多いこと。最近も、たみとや店頭に「最初のころはデモに行ってました」という若いカップルが来た。
一方、愛国心は、個人を中心に考えるからこそ、まだ、それほど伸びてない。
Uy：しかし、「社会志向」が低いと言っても、ボランティアする人多いんじゃないか。
Y：ただ、「非政治的」なのかな。
G：そう、古市氏も「ボランティア多いのは評価すべき。ただ、カンボジアでこどもの学校つくるとか、自分の足元でやるのが少ない」とも言っている。

G：一方、この徹底的な「個人志向」って、人の命と労働の尊厳を尊重する「ほ

んとの自立」ともいうべき「質」に変わり得ることを示しているともいえないか。図 1 に印をつけたように、「個人志向」が「社会志向」を上回ったのは過去 2 回ある。高度成長末期の 1972 年とバブルが盛りになった 1987 年で、その後、また「社会志向」が増加している。

いずれも、その後「成長」の回復がしばらく続いた時期。言いかえれば、「自分の生活がまた豊かになる成長を期待」して「社会志向」が増えてきたのではないか。

それに対して、ここ 10 年は、「ついに成長が期待できない」時期。

そういう「あきらめ」とともに、「自分だけ」にしても「生活をほんとに守らないと危ない」という意識ではないか。

Mg :「今は貧困よりも自分の承認が問題」と古市氏は言うが（付録 2 最後）、承認欲求は過去にもあり、「成長期待」の時は国や会社からの承認で、今は個人で SNS からの承認。

G : 若者だけじゃなくて、役人の「忖度」もそういう「空しい承認」のためじゃないか。

そのために必要以上の「議論」は控える。

ひどい労働環境でも、「議論」しながら労組で闘う人は多くない。

しかし、この間の急激な動きのもうひとつの特徴は、「“今日より明日がよくならない”と思う時、人は“今が幸せ”と答える」と言われる「満足度」を含めれば、その動きの出発点が、2008 年リーマンショック、年越し派遣村、“労働の尊厳を奪った元年”とも言える年であること。2011 年原発事故は、その動きを加速した形。

Y : コンビニでも立ち上がる人が出てきた。

G :「無関心とあきらめの海」のなかで、手探りの「議論」をしながら始めたオリンピック返上署名運動に「アクセルが入った」のも、Mr ちゃんの除染労働の「無駄」の話。

「個人志向」の質が人の命と労働の尊厳の「承認」へ変化するまでもう少しなのかも。

N : 少なくとも、沖縄県民投票の記事「若者の選択」の最後で、大工見習の 21 歳が「県民投票って意味ないかも。でも、政府が何を言い、どうするか見てみたいんです」と言っているように、「見ている」し「考えて」いる。それが希望だと思う。

そして、沖縄の長い苦闘の歴史を踏まえ、賛成にしろ、反対にしろ「議論」している。

Y : 最近、仲間と「みんなはどう立ち上がるのか」を議論した。

N：沖縄だけでなく、2011 年直後にデモが盛り上がったように、オリンピック返上署名運動も想定以上であるように、「見て考えている」人に火が付くきっかけは、「議論」の場のつくりかたもあるが、今、いろんなところにあるんじゃないか。
G：「自分だけ」から「自分たち」へということに簡単な結論はないが、長期間の意識調査のなかで、この間の急激な変化には一定の意味があるのではないか。「投票に行かない青年のなかにも、農業などで、尊厳のある生活と労働を新たな協働で創ろうとする人たちが多くいる」とコラムに書いたが（「草稿」28 頁）、実際、知り合いの Mn ちゃんは、いろんな人の協力で自然農の自給生活を組み立てながら、県民投票直前の辺野古に行ったり、原発の討論会に参加したりしている。

次回（4 月 28 日プチ労 101 回目）は、ドイツの史実に戻って、今まで、都市部中心の闘いを説明したのに対して、農村部について、いい資料を見つけたので、補足で書いたコラム/ナチス台頭の主力は農民！―しかし「あと一歩」労働の尊厳か民族か/（次回ご持参ください）で、農村でも「あと一歩」でナチスを阻止できたかもしれないことを見たい。

以上

＜2019-4-28 プチ労 101 まとめ＞
参加者：9 人（Mk さん久しぶり参加。大学 2 年生 Is さんと Tk さん初参加。そのほか、シルバニアファミリーで、みんなでプチ労のような勉強とごはん食べるところ再現していた幼児 1 と乳児 1）　中高年：青年＝3：6（青年率最高）　地域：それ以外＝5：4
メニュー：ガパオライス（鶏肉のバジル炒め）、タイ風ナスのサラダ　　完食♪
「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 13 回
　第三章　1930 年代（世界大恐慌～日中戦争開始まで）
（１）世界最大の反戦勢力ドイツ労働者階級と資本代理人ナチスの闘い
　補足コラム/ナチス台頭の主力は農民！-しかし「あと一歩！」労働の尊厳か民族か/
　レポーター　ごう

　「ナチスを生み出したのは自分のことしか考えない大衆」？
　過去最大の「個人志向」と「現在の生活への満足度」と言われる今の日本と似ている？
　それを考える意味で、当時のドイツの選挙結果を見ると、ナチスを押し上げた

主力は都市中間層というより、農民だった。しかし、そこでは、ナチスが、農民が取り戻そうとした労働の尊厳を「返す」代わりに、「民族の尊厳」にすり替えて支持をとりつけていた。
　こんなレポーターの提起が、多彩な参加者のおかげで、歴史を超えて、現代での「すりかえ」なり、民族主義がどうして生まれるかの議論になった。

G：営々と育てて初めて作物を生む土地は、農民にとって単なる資産ではなく、彼らが「生かされ生きていく」ところ。そこに彼らの労働の尊厳の意味が込められていた。それを社民党、共産党はもっと見据えるべきだった。それに対して、ナチスは「土地は民族の血統が維持される場所。それを守る農民は民族の美徳と伝統の担い手」だと、「すり替え」を強調して農民を持ち上げた。
Mg：今日、田植えを手伝ってから来たが、今の日本で農業を真剣にやる人も、土地を私有財産だと思っていない。自然との共同作業のための“総有物”。
G：大規模農業ではなく、そういう家族や少数で取り組む「小農」をあらためて評価する宣言が、昨年末、国連総会でも決議された。（追記 1 参照）
Y：もともと、ナチスは、ドイツ民族にとって、ポーランドなどの東方は自らの「生存権」という思想を持っており、ポーランド侵略後には、大規模な農民の植民計画をたてた。（追記 2 参照）

N：なぜ、“民族”にすり替えられてしまうのだろうか？
Uy：今でいえば、“自己責任”が浸透しているからかな。
Mk：今、差別の構造が作られていると思う。自分は“ゆとり世代”の第一というかゼロ年代だが、ゆとり教育では、しきりに起業することが強調されていた。その裏腹に民族主義が生まれる。
N：起業が民族主義？
Mk：起業は、“頑張れば報われる”と“希望”を見せる。しかし、それができるのはわずかな人で、大半の人は、結局、自分が持っていると言えるのは、日本人であること、国籍だけということになる。
N：そうか。非正規化がすすむことの方ばかりを注目してきたが、青年に教育されているのはそういう見せかけの“希望”なんだ。本屋にホリエモン類似の本ばかり並んでいるわけだ。
Tk：その典型は SFC（慶応大学湘南藤沢キャンパス）。みんな、何がやりたいかわからないのに、起業の方法を教えてくれると殺到して、ゼミの競争は激しくてなかなか入れない。
Is：（その一方）僕は大学で、先生に了解をもらって、授業の時に 5 分だけ辺野古の問題を説明し署名を呼び掛けた(すごい❣)。が、“へのこ”が読めない人がい

たし、選挙についても、“そんなのあったっけ”という人も多い。

Mk：でも、お金をもっていることは、自由ではある。
Sk：たしかに、プチ労にしても、交通費もそうだし、お金がまったくなければできない。
Mg：しかし、お金は結局むなしい。
G：やはり起業でお金を持てる人はわずか。アベが「日本人の国」と言い張る日本の「移民」の状況は、すでに 400 万人。新設した「特定技能」の外国人を原発廃炉作業に使うように、大半が日本の非正規化の流れに即している。彼の問題は我々の問題。（追記 3 参照）。

追記 1：2018 年、国際連合「小農と農村で働く人々の権利に関する宣言」
追記 2：「農業綱領」後のナチスの「入植政策」－「満州」開拓政策と相似
追記 3：日本は 400 万人の「移民国家」－しかし非正規化と同じ道

Is：いろんな人が話しあえる“場”がもっと必要。
Mg：ただ、すでに問題意識をもっている人以外の人を集めるのは苦労する。

N：簡単ではないが、たくさんの人と認識を共有し広げていくためにも、今日の議論も、歴史を超えて、今、大事なことを確認する作業になったんじゃないか。

　次回 5 月 26 日プチ労 102 回は、1930 年代のアメリカ。
第一次大戦後、イギリスに代わって世界の基軸国となり繁栄を謳歌したと言われるアメリカも、世界恐慌を経た労働者、農民の闘いで「体制崩壊の危機の淵」にたっていた。
　そのなかで、ナチスとその政策の「兄弟」とも言える「ニューディール政策」で、体制の延命を図る。また、それを推し進める基盤ともなった人種差別政策は、ナチスの反ユダヤ法の「モデル」になった。
　第二次大戦後、日本にとって「それなくしては生きられない」？と言われるアメリカの大戦前の労働者・民衆と国家・資本とのせめぎ合いを見る。
以上

＜2019-5-26 プチ労 102 まとめ＞
参加者：8 人　中高年：青年＝4：4　地域：それ以外＝5：3
メニュー：シンガポール・チキン・ライス(インド米)＆サユリマ(シンガポール風野菜カリー)

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第１４回
第三章　1930 年代（世界大恐慌～日中戦争開始まで）
（２）ナチスの“兄弟”「ニューディール」とアメリカ労働者の闘い（前半）
「草稿」31P から 41P
レポーター ゆいちゃん

世界恐慌の震源地アメリかの 1930 年代、ナチスと同時期に登場した「ニューディール」政策は、「社会主義的」と言われながら資本主義の延命を図る点で、ナチスの政策と“兄弟”。また、アメリカ建国以来の白人優位思想にもとづく人種差別と人種の分断統治は、ナチスの反ユダヤ法のモデルとなり、アメリカ資本主義を支えた。「自由と民主主義」のアメリカは、実は「人種資本主義」だった。

レポーターの「草稿」本文を読み上げながら、テンポよく意見や感想をはさむ小気味のいいレポートで、みんなの本音トークがずっと続いた。

「自由と民主主義の国アメリカへのあこがれ」もある人がいる一方、「やっぱりアメリカはろくでもない」「ほんとに嫌いです」とバッサリの人々も。

さらに、トークは、「日本のわれわれはどうなのか」問い直すことになり、意見の攻防が続いた。

みんなが「自分の腹の底から」語るトークは、Mk さんが、たみとやに寄贈してくれた、メーカーで言えば 40 万から 70 万円にもなる音質の手作り絨毯製スピーカーとともに、亭主にとって Birthday 直前の最高のプレゼントだった。Thank you!!!!!!!

Reporter/Yy：「草稿」にあるように、奴隷解放宣言も支配階級の利害で出されたということで、リンカーンも偉い訳じゃない。学生の時に、先生がアメリカ建国以来のインディアン排除のために、それなりの「法」を作ったと言っていたが、調べてみると、白人に都合がいいだけで「法律」そのものに意味がない。アメリカは出だしからひどい。ロクなことしてこなかった。
Uy：今のイギリスの EU 離脱の騒動の原点みたいだ。
G：中高年世代というか、僕などは、アメリカの余剰穀物による小学校のパンと脱脂粉乳の給食に始まり、テレビドラマや、ボブディランなどの音楽など、「アメリカはいい国」というイメージも反面あるが。。。
Mg：侵略に始まるアメリカは大嫌い。存在自体が罪。滅びるべき。（オー！の声）。
R/Yy：インディアンに国を返して、黒人にはちゃんと謝った上で相当の保障を

すべき。自分の仕事にも関連するが、ナチスがアメリカの人種政策をまねたのと同じ時期に、日本も優性思想があり、今、問題になっている日本の優生保護法も、アメリカが「自由と民主主義」を教えてくれたという、第二次大戦後すぐに、アメリカの影響でできた。
Mm：映画で言えば、スピルバーグの「リンカーン」は英雄に描き、最近の「グリーンブック」で見る“カラーライン（人種の境界線）”はほんとにひどい。アメリカって複雑。

N：今、日本でわれわれはどうなんだろう？　朝鮮侵略と差別の「錦の御旗」になった天皇制について、天皇交代の参賀に大勢の人が集まり、「日本人に天皇は必要」という人も多い。アメリカの人種差別には「天皇」はいないが。
G：アメリカの「天皇制」は、「白人のための自由と民主主義」だ。
Mg：それが、アメリカの「国体」なんですね。
Mm：前にも言ったが、慰安婦問題や徴用工問題は、和解というのを探るべきじゃないか。宗教で大事な“ゆるし”ということがある。そうしないといつまでも続く。
N：いい提起。たしかに、今、日本で、マスコミの論調もそうだし、世論調査なりアンケートをとれば、天皇賛成、慰安婦・徴用工もういい、という回答が多いのかもしれない。しかし、それでいいのか、どういうことなのか。
G：慰安婦・徴用工の賠償問題がいつまでも続くのは困るといっても、So What?（それが何か？）　じゃないのか。
Uy：そもそも、日本は一度も今まで謝ったことがない。
Mg：和解する必要なんてない。まず、謝って、向こうが「もういい」というまで謝り続けるべきだ。
G：昨年、初めて韓国ソウルに行って開館したばかりの「植民地記念館」に行った。日本が侵略したアジアの他の国にはすでにあるが、韓国ではいろんな妨害もあり 10 年かかって開館した。そこでは、日本の侵略の様子だけではなく、それに協力した朝鮮人の名簿づくりをしていることが展示されていた。日本には、侵略した日本人の名簿など一切ない。
Uy：まずは、そういう事実を知っていかなければ。

Mm：そうはいっても、朝鮮の人とはちがう、日本に生まれ育って住んで、日本語を話す、というような日本人のアイデンティティーがあるのではないか。それぞれのアイデンティティーを踏まえた相互理解というか。。。
G：そうかもしれない。しかし、映画「GO」で主人公の在日青年が「俺は何者だ」と叫ぶように、韓国の牧師が「朝鮮の民族解放運動は、自己のアイデンテ

ィティーを求めるナショナリズム」だと言っていた。それに対して、治安維持法で逮捕・虐殺された朝鮮の有名な詩人ユン・ドンジュが特高の日本人取調官に「あなた方には劣等感がある」と言ったように、侵略者日本にあるのは「自分は何者か、自分のアイデンティティーを見失ったナショナリズム」とも言える。
Ys：「日本人」ではあるが、僕も、自分のアイデンティティーって何かということをずいぶん考えてきた。マルクスの資本主義社会の見方だったり、いろんな先達の考えなどを補助線にして。

Mk：しかし、人間って、差別をすべてなくすと、純粋に実力本位の社会になってしまう。狩猟するだけの原始の時代から、獲物を貯蔵することが始まって以降、それをどのように分けるかをめぐって、人間の序列付け、差別が始まった。
N：実力本位にしかならないというのは違和感がある。
G：「人間って戦争するものよ」とか言う人がいるが、「人間の本姓」ってそんなに決まっているものなのか。遠い昔のことはよくわからない。貯蔵というより、金の貯蓄、資本の拡大が始まった資本主義 500 年のことを考えたほうがいいんじゃないか。
Ys：そう、資本主義は歴史的、そういう歴史で考えたほうがいい。
Mg：米作りを手伝っているが、今、そういう土に根差して、地域で人が協働してやっていく社会があると思う。
Mk：こういう、いろいろトークできる場があれば、実力本位だけにはならないのかもしれない。
（あとで聞くと、Mk さんは、前日、小説の学校で、元 NHK ディレクターの 60 代男性が書いてきた「電車の優先席でずっとスマホをいじっていて席をゆずらない青年は知的障害者なのではないか」という主旨の小説を徹底的に批判したが、他の受講生の反応が妙に作者に融和的だったと言っていた。）

次回（6 月 30 日プチ労 103 回）は、1930 年代アメリカの後半。「ニューディール」を引き出したアメリカ労働者・農民の闘いの実相。そこは、「自分たちのことを自分たちで決めるため」に白人と黒人が連帯した唯一の場でもあった。
6 月 8 日シネマ共謀＠たみとやでは、当時の実相を描き不屈の人間賛歌と言われた映画「怒りの葡萄」を上映。
ドイツ、アメリカ、日本で、たえず民族の問題が覆いかぶさってくることを見てきたが、一方、民衆の闘いの歴史をたどることは「体制が民衆に忘れさせ

たがっていること、つまり、一見無力な民衆でも抵抗の巨大な能力をもっており、一見現状に甘んじているように見える民衆でも変革を要求する大きな可能性を持っていること、それをわれわれに思い出させることになる」（ハワード・ジン「民衆のアメリカ史」）

以上

＜2019-6-30 プチ労 103 まとめ＞
参加者：9 人（NAZEN 東京の仲間 A さんと K さん初参加。そのほか Sk さん子連れ《2.9 歳 N、0.5 歳 F》参加）　中高年：青年＝4：5　地域：それ以外＝4：5
メニュー：インドネシア風肉味噌丼、タフ・ゴレン・サンバル（厚揚げとトマトの甘辛炒め）、近所の T さん差し入れの手作り清里高原有機ルッコラ・サラダ

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 15 回
第三章　1930 年代（世界大恐慌～日中戦争開始まで）
（２）ナチスの“兄弟”「ニューディール」とアメリカ労働者の闘い（後半）
　「草稿」41P から 50P
　レポーター ゆいちゃん
　補足コラム「1930 年代アメリカ労働者・民衆の大闘争の意義」by GO

　世界恐慌を経た 1930 年代のアメリカでは、労働者が「白人も黒人もともに闘う唯一の場」となった大闘争があった。
　それは、アメリカ資本主義を「体制の危機の淵」に追い詰め、「社会主義的」とも言われる有名な「ニューディール」政策を引き出した。
　そして、この大闘争は、建国以来、アメリカ資本主義を裏で支えてきた「人種差別主義」の変質の契機となり、今のアメリカの原点ともなっているのではないか、ということで、トランプ登場以降のアメリカをどうみるかといった議論もワイワイ続いた。
　プチ労同伴が何回目かになり、もうすぐ 3 歳の N は、「面白かったことは」と聞かれて、「（みんながワイワイやっている）勉強。それと、A ちゃんに会えたこと。」
　Thank You All!!!!

　1933 年、ルーズベルトが大統領になって「ニューディール」第一弾を実施した後、1934 年から 1935 年、「自分たちで闘うしかない」と一般の労働者

「Rank & File」が立ち上がった 4 大ストがあり、労働 3 権を認めた「ニューディール」第二弾を引き出すとともに、新たな産業別労組 CIO が生み出された。

1936 年から 1937 年には、さらに多くの「Rank & File」が立ち上がり、創造的な「Sit-Down（工場座り込み）」ストが激増し、多くの大企業に労働組合を認めさせるとともに、最低賃金法や社会保障法などの「ニューディール」第三弾を引き出した。

それでも、収まらない恐慌の影響と労働者の勢いに、ルーズベルトは戦争の準備を始める。第二次大戦は、「ファシズムと民主主義の戦争」というより、「資本のための戦争」だった。

Reporter/Yy：この時期、ドイツでもナチスに対して労働者がすごく闘ったということだったが、アメリカでもこんなに労働者の闘争があったなんて知らなかった。
N：ほんとにすごい闘争。

一番長い「Sit Down（座り込み）」ストという GM フリント工場占拠では、

「スト委員会は、娯楽、情報、郵便、衛生、防衛などの部門をつくり、毎朝、工場内で集会をして、“財産損壊”といわれないように清掃管理し、法廷もつくり、各当番のさぼりや酒類持ち込み禁止や分煙のルール違反を取り締まった。最大の罰は“工場外追放”だった。」（第三章「草稿」47 頁）

労働者が自分たちの労働の尊厳を取り戻すために自分たちでやっていて、涙がでた。
Sk：「ニューディール」政策は知っていたが、それは、労働者の闘争が引き出したんだね。

Yy：そこまでいったのに、それから、共産党も相当な影響力を持っていたのに、創り出された大きな労組 CIO も、共産党もルーズベルトを支持して、戦争にも賛成して、「社会主義革命」とかにならなかったのはなぜなのかな？
Ys：アメリカの一番の特徴「自由と民主主義」の基本として、「私有財産制」が大事というのがあるからかな。
GO：ただ、もともと、アメリカの独立宣言からして、「自由と民主主義」は、黒人も女性も含まず、白人男性の「自由と民主主義」だった。

補足コラムの最初（1 頁「“人種資本主義”と“社会主義革命”」）に書いてみたのは、根底には、アメリカ建国以来の人種差別主義、いいかえれば「人種資本主義」があったのではないかということ。

大闘争をともに闘った黒人の大半は、「ニューディール」の埒外だったし、

一般の白人労働者も戦争になっても史上最高の件数のストを闘い続けたのに、CIO も共産党も「ニューディールでよし」とした。
　しかし、同時に、1930 年代の大闘争は、「人種資本主義」の変質を迫る「新たな黒人」を生み出した。
ここは、黒人詩人のラングストン・ヒューズ、この時期の最も有名な黒人作家というリチャード・ライト、その一番弟子のジェームズ・ボールドウイン、3 人の自伝から、彼らの感じ方や考え方などを少し詳しく追ってみたので見てほしい。
（補足コラムの 2 節目 4 頁「黒人作家たちが見た革命と紡ぎだした“新たな黒人”」）
そして、1960 年代末までかかるが、公民権運動など黒人の激しい闘いは、ベトナム反戦闘争や女性解放闘争を引き出し、「アイデンティティー政治（人種・ジェンダー・民族・性的指向・障害などの特定のアイデンティティーに基づく集団の利益を代弁して行う政治活動）」というアメリカの政治の変化を生み出した。
それは、同時に「白人労働者の憂鬱」のはじまりだった。
2016 年、トランプの登場は、そういう「人種資本主義」の変質、そして、民衆が根本的変革を迫る新たな「革命」の可能性を示してもいるのではないか。
（補足コラム 3 節目 7 頁「アメリカの“人種資本主義”の変質と“革命”の可能性」）
1930 年代大闘争はその原点ともいえる。

Mm：1930 年代とも比べて、トランプは資本家なのに、なんで白人労働者が支持するんだろう？
GO：今、白人労働者を侮蔑する言葉「ヒルビリー（田舎者）」を題名にしている「ヒルビリー・エレジー」の著者によれば、トランプは資本家で金持ちなんだけど、白人のヒラリー・クリントンや黒人のオバマのような「自分たちを無視し、ひそかに侮蔑するエリート」には見えないらしい。
　「オバマを受け入れない理由は肌の色とは何の関係もない。オバマはアイビー・リーグ（北東部の名門私立大学群）の法学の先生のようだ」（コラム 10 頁）
Mg：今、日本でちょっと評判の「矛盾社会序説（御田寺圭著）」という本によれば、保健所で、白い小さな犬に比べて、引き取り手のいない「大きな（大人の？）黒い（黒人ということではなく）犬」が、白人労働者で、トランプは、彼らをまとめて引き取った。
Ys：たしかに、「社会主義」というサンダースが支持を集め、彼がトランプと戦えばわからなかったと言われている。
Yy：補足コラムの最後に「今や、民族（人種）の尊厳より、労働の尊厳」（コラム 11 頁）とあるが、今、アメリカの白人労働者は、ぎりぎりであれ、「中

流」で、貧困層の黒人のように国から支援を受けるのはよしとしないらしい。
　1930 年代労働者のように闘うのだろうか？
GO：トランプ的か、サンダース的か、「せめぎあい」だと思う。
　「ヒリビリー・エレジー」著者なども「今の白人労働者の親、あるいはその前の世代までは、我々の労働がこの社会を動かしているという労働者の誇りがあった。」と言うが、それを求めているという意味で、1930 年代の労働者と同じではないか。
　そして、「中流」までもが動き始めるときに社会は変わる。
Mm：今、トランプは、黒人というより、移民排斥だね。
GO：「白人労働者の憂鬱」が始まった 1970 年代から、アメリカへの移民は、再び急増した。貧困層の黒人が民営化した刑務所の稼働率を上げるために収監され続けているのが実態だが、“アイデンティティー政治”という建前で、黒人は“やり玉”にあげられない。
Ys：トランプが強力に支援するイスラエルは、LGBT を強く称揚しているが、その裏には、イスラム社会との差異を際立たせる政治的意図もあるようだ。
GO：変質した「人種資本主義」を「民族」で立て直そうっていうことだね。

　「現代と不気味なほど似ている」と言われる 1930 年代、ドイツのナチスと労働者階級の闘い、アメリカの「ニューディール」を引き出した労働者の闘いを経て、次回からは、日本の歴史に戻って、日本資本主義の「矛盾」が引き起こしアメリカと日本の戦争の出発点となった「満州」侵略、現代日本の「写し鏡」とも言える「時代の閉塞感」が支えた「満州国」、そして、その崩壊をもたらした中国・朝鮮民衆の闘いを見ていきたい。

以上

長いので、＜小見出しの目次＞をつけました。

＜2019-7-28 プチ労 104 まとめ＞
参加者：10 人　中高年：青年＝4：6　地域：それ以外＝5：5
メニュー：キーマカリー、ナスのザブジ（ココナッツミルク煮）
　ご飯 9 号ともに完食御礼♪

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 16 回
第三章　1930 年代（世界大恐慌～日中戦争開始まで）
　（３）朝鮮侵略が生んだ“矛盾の実験場”「満州」侵略　概説　レポーターGO

付録 1：「満州」地図
付録 2：「満州」【起承転結】年表

1931 年、ドイツでナチスが台頭したころ、アメリかで「労働者の反乱の気配が濃厚」になったころ、日本は「満州」侵略を本格的に開始した。
　よく知らない「幻の満州」、中国では「偽満州国」。しかし、調べてみると現代の「写し鏡」のような「満州国」について、「草稿」で 7 節にもわたるが、今回から 4 回にわたって見る。
　今回は、「どうして満州」を中心に概説し、切れ目なく質問・意見が続いた。

＜Report & Talk 小見出しの目次＞
○「満州」ってどこ？
○「満州」侵略の起承転結の【起】は日露戦争
○根底には、朝鮮侵略で抱え込んだ日本資本主義の矛盾—米と糸と朝鮮人
○「満州侵略の尖兵」朝鮮人はユダヤ人を除いて世界最大の「流浪の民」へ
○「満州」侵略は「軍部独走」ではない
○「満州事変」から「満州国」建国、「満州」ブーム。それは今の「半グレ」か？
○「満州」ブームと戦後日本の「原発」ブーム
○「満州国」は、労働の尊厳を踏み潰された民衆のパワーで崩壊した

○「満州」ってどこ？　　⇒付録 1：「満州」地図

Reporter GO：「満州」は朝鮮半島の北（地図では河を示す青い線と白い点線で囲まれた部分）。面積 110 万㎢で日本列島の 3 倍、朝鮮半島の 5 倍。知らなかったが、日本・朝鮮より広大な平野があり 3 千万人以上の民衆が暮らしていた地域。
N：広い！「人のいない荒野」のイメージだったが、こんなに平野があって、こんなに人がいたんだ。
Ks：日本がつくった「満州国」は、地図の「南満州鉄道」がある南の部分かな？　爺さんは関東軍将校だったようだけどよく知らないな。
GO：いやいや、それと T 字型に走るロシア・ソ連が経営していた「中東鉄道」とその北全部。
Mg：「満州国」になってから、「中東鉄道」はソ連が日本に売却した。

○「満州」侵略の起承転結の【起】は日露戦争
⇒付録 2「満州」【起承転結】年表

GO：アベが首相談話で「アジアを元気づけた」という日露戦争勝利は、ロシアが朝鮮に迫るのを恐れた日本が仕掛け、戦費も戦局もギリギリ、辛くも、同じくロシアをけん制したいアメリカの仲裁で講和した戦争。
　しかし、それで、日本は朝鮮支配を確実にし、南満州を奪取した。
　日本国内では「10 万の精霊（戦死者数、ロシアより少ない）と 20 億の財産（戦費。国家予算の 8 倍。大半がイギリス・アメリカ資本からの借金）を犠牲」にした戦争だから、もう「満州は日本の利益線」と言われ、民衆の間にも第一次「満州」ブームが起こる。

○根底には、朝鮮侵略で抱え込んだ日本資本主義の矛盾—米と糸と朝鮮人

GO：「矛盾」を端的に示すのが、資本に必要な労働力としての朝鮮人、その労働力の食料としての米、そして生産させたのが、1960 年代まで日本の輸出の主力となった糸。
　朝鮮支配について、日本政府は一貫して「合法」だったというが、日露戦争直後に「乙巳（ウルシ）保護条約」、1910 年に日韓併合（韓国では「併合」ではなく「強占（強制占領）」という）条約を軍隊による暴力で「非合法」に結んで確実にした。
　その直後から、朝鮮の「土地調査事業」を開始し、朝鮮農民の 7 割を日本人地主の小作にし、10 年後の 1921 年から「日本のコメが足りない」と「朝鮮産米増殖運動」を始める。
　当時、朝鮮の一人一日 2 合に比べて日本国内消費量は平均一人一日 3 合で「足りない」わけではなかったのに、どんどん朝鮮産米を日本に移入し、10 年後には、日本国内の朝鮮産米流通量は 3 割に達し、米価は 4 割下落し、かえって日本農民が窮乏。
　資本は、米価下落で日本の労働者の賃金を上げないで済んだが、窮乏した農民と低賃金の労働者では、「糸」を中心とした資本の生産物が国内では売れずに、海外、特に中国にダンピング輸出を続けるしかなくなった。
　こういう米と糸との「矛盾」が、中国での「拠点」としての「満州」を確実にしようという動機になった。そういう意味でも、「満州」は「矛盾に満ちた実験場」。
MK：「糸」というのは具体的には何？　綿製品は？
GO：主要には、蚕からつくる生糸とその織物。

Ys：綿製品も多かった。
GO：イギリス支配下の「インド綿」を輸入して織物にしたものも多かった。それもまた、中国でのイギリスなど欧米諸国との競争の原因になった。

○「満州侵略の尖兵」朝鮮人はユダヤ人を除いて世界最大の「流浪の民」へ

GO：産米の移出で、朝鮮での米消費量は、1920 年の一人一日 2 合から 1930 年には一人一日 1.4 合（日本人は一人一日 2.8 合と倍）と 4 割減。土地をとられ食えなくなった朝鮮人は日本と「満州」へ、「職と食」を求めて「流浪」していった。
　彼らは、日本では日本人より低賃金で過酷な労働を担い、「満州」では過酷な農業開拓を担った。
　1910 年「韓国併合」時に在日朝鮮人は 800 人だったのが、1930 年には 30 万人。在「満州」朝鮮人は 1910 年に 16 万人だったのが、1930 年には 60 万人。
　そして、「満州」侵略に際し唱えられた解決すべき「満蒙問題」というのは、「満州」へ押し出された朝鮮人が、中国民衆に迫害される「懸念」であり、侵略の名目は「在満朝鮮人を守るため」だった。朝鮮人は「満州」侵略の尖兵にされた。
　その後、1937 年以降の日本への「強制連行」や「満州」への「強制的集団移住」を経て、1945 年、日本の敗戦時には、在日朝鮮人 236 万人、在「満州」朝鮮人 216 万人、合計 452 万人で、当時の朝鮮人口 2800 万人の 16%。
　これは、在外華僑の比率より多く、ユダヤ人を除き、朝鮮人は世界最大の「流浪民族」になった。

○「満州」侵略は「軍部独走」ではない

GO：「満州」侵略の「起承転結」の【承】、「満州」への具体的な軍事行動開始は 1928 年の山東出兵。これの淵源は、1917 年ロシア革命、それから、それを恐れた 1921 年、欧米資本主義国によるワシントン会議での「国際協調」と「中国の門戸開放宣言」にある。
　ロシア革命は欧米資本主義国の分捕り合戦である第一次世界大戦を終わらせたが、直後から革命を亡き者にしようとする欧米および日本のシベリア出兵があり、それに対して、日本では米騒動、「満州」では革命を守るために、シベリアへ各国出兵兵士を運ぶ中東鉄道を止める大ストライキ、朝鮮では 3.1 独立運動、中国本土では 5.4 排日運動がおこる。

連鎖する民衆の闘いを前にして、資本主義諸国は、「お互いあまりけんかせず、仲良く分捕りあいをしていこう」と宣言し、アジアで突出しようとする日本もけん制する。
これに対して、中国の拠点「満州」を確実にしたい日本の田中義一内閣は、中国統一を目指して「満州」に迫る蒋介石を抑えるために山東出兵をするとともに、「東方会議」で「満州は日本の特殊権益であり、中国から分離する方針」を明確にする。
これを受けて、関東軍は、「満州」軍閥の張作霖爆殺事件を起こす。
「満州」侵略は「軍部独走」ではない。世界大恐慌の前夜だった。

○「満州事変」から「満州国」建国、「満州」ブーム。それは今の「半グレ」か？

GO：「満州」侵略の起承転結の【転】として、1931 年 9 月 18 日（中国では今でも 9.18 事件）、関東軍の謀略により「満州事変」。その後、中国支配層、民衆の抵抗を半年で排しながら、「五族協和（五族は勝手な日本・朝鮮・漢・満・蒙古）の王道楽土」を唄った「満州国」建国。
日本国内では、アベの祖父岸信介の叔父松岡洋右が議会で「もう満州は利益線ではなく、日本の生命線」と演説し、内田外相は「満州事変は正当防衛。満州国は住民の独立運動。よって日本国を焦土にしても満州国を承認する」と「焦土演説」し、1933 年には国際連盟脱退。
この当時の状況と、2014 年、国際社会が一致して批判しているなかで、日本軍「慰安婦」問題を岸信介の孫アベ政権が、否定派とともに「無かったことにする」キャンペーンを繰り広げるともに、集団的自衛権・特定秘密保護法・原発再稼働を強行した状況が酷似しているとも言われる。
一方、当時、国内では、世界恐慌を経て、後で見るように、若い人がみな一時は「マルクス・ボーイ、ガール」になったような戦前の労働運動の最盛期となる反面、1933 年をピークとした「エロ・グロ・ナンセンス」、「自殺ブーム」のなかで、第二次「満州」ブームとなった。
MK：「自殺ブーム」って、どんな数だったのか？
MM：半藤一利さんの「昭和史」（？）によれば、丸ビルからの飛び降り、続く三原山での「自殺ブーム」で昭和 8 年（1933 年)に男 804 人。
GO：斎藤桂さんの「1933 年を聴く」でも、1933 年 1 月、実践女学校生に始まる三原山では、「この年、未遂も含め男 804 人、女 140 人」。
MK：今の年間自殺者 3 万人（月 2,500 人）というよりは少ないが、若い人なんだ。一方で、最近、NHK が 50 年間取材を続けたブラジル移民のドキュメン

タリーを見たが、そこにあった「一攫千金」という意識に「満州」ブームは似ているのかな。
Ys：1930 年代当時、「マルクス・ボーイ」たちも、一種の「社会主義の夢」を「満州」に抱いた面がある。
MK：今、「半グレ（暴力団とは異なり暴対法に引っかからないアメーバのような「オレオレ詐欺」をはじめとする犯罪集団)」に多くの大学生がなるという状況とも似ているのかな。
GO：そうそう。1911 年に石川啄木が言った「何か面白いことないかなと自分の命を持て余している」「時代閉塞の状況」が、1930 年代、ひとつのピークをつけたとも言える。それは、今の日本とも似ているかもしれない。次回（8 月 25 日)、みちこさんレポーターで第三節「五族協和・王道楽土の矛盾」で、そういう日本国内の状況を見たい。

○「満州」ブームと戦後日本の「原発」ブーム

N：「人がいない荒野ではなく、3 千万人も人が住んでいる広大な平野がある満州」にどうして、侵略し、多くの人が平気で人の土地に行ったのか、と思うが、戦後日本で、「地域を豊かにし、日本を豊かにする夢のエネルギー」として、原発が「いけいけどんどん」進められたのと似ているのかもしれない。
GO：その意味では、次々回、しょうごさんレポーターで第四節「総力戦の準備—満州産業開発計画の失敗」で見るように、大失敗したにも関わらず、その計画を取り仕切った岸信介は、戦後、何の反省もなく、それを繰り返して「高度成長」を演出し、原発を開始した。そして、今、その孫アベが、原発に固執している。
Yy：でも、開拓移民は、欧米の植民地のように支配者は地主で何もしないわけではなく、自ら農業に汗を流した。
GO：そうだけど、同じく、しょうごさんレポーターの第五節「棄てられる開拓移民」に出てくるが、「人の土地」だと気づいて移民をやめた村長もいた。原発反対運動でもそうだが、それが、どうしてなのかも見ていきたい。
　それから、「満州」は、朝鮮人と中国民衆を「棄民」にし、敗戦とともに日本人開拓移民を「棄民」し、彼らが汗を流して作った土地と作物は戦争で収奪した以外は放り出した。
　「棄民」と「焦土」の「満州」。

Aa：ほんとに「満州」って知らなかった。教科書でもほとんど触れていない。
N：親戚が「満州」経験者とか、引き上げ経験者だという人は多いが、教科書

的には、日本の一種の「ひけめ」ということかな。
Uy：いわゆる「つくる会教科書」ではどういっているのかな？
GO：2009 年自由社「日本人の歴史教科書」（196 頁）では、「満州で日本人が受けていた不法行為の被害を解決できない政府の外交方針に不満を募らせていた国民の中には、関東軍の行動を支持するものが多く」と「仕方なかった」という書きぶりだが、事実と違う。あるいは、「日本人」って朝鮮人のことか！？

○「満州国」は、労働の尊厳を踏み潰された民衆のパワーで崩壊した

GO：「満州」侵略の起承転結の【結】は、1937 年日中戦争開始から。
　一般に「満州国」は、日米戦争敗戦、ソ連参戦で崩壊したと言われるが、「矛盾」の塊、「満州国」は、建国後数年にして、崩壊が始まったと言える。
　「満州国は、武力弾圧と監視なしには一日たりとも存在しえなかった」と言われるように、中国・朝鮮民衆の抗日闘争で日々掘り崩されていった。
　それを、10 月のプチ労、ゆたかさんのレポーターの第六節「満州国を揺るがせ続けた抗日武装闘争」、第七節「満州侵略の兵站基地—朝鮮の労働者・農民の革命的な闘い」で見ていきたい。

以上

＜2019-8-25 プチ労 105 まとめ＞
参加者：10 人　中高年：青年＝4：6　地域：それ以外＝5：5
メニュー：沖縄タコライス（あまり辛くしなかった）、沖縄風ナスの黒糖甘辛煮、近所の T さん差入れ手作り採りたて有機いんげん＠清里高原の胡麻和え、Y さん差入れ友人 R さん製造生マッコリ、差入れビール・ワインなど

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 17 回
第三章　1930 年代（世界大恐慌～日中戦争開始まで）
レポーターみちこさん
　第三章（３）朝鮮侵略が生んだ“矛盾の実験場”「満州」侵略
　　第三節　「五族協和」と「王道楽土」の矛盾

　レポーターMm さんの簡明でピシッとしたレポートを受け、簡単な「答え」はないが、「ひとの国の侵略」にもかかわらず、特に、「満州国」建国時に盛り上がった「満州ブーム」を支えた青年たちの意識、そこに見られる天皇の存

在、それと今の日本の意識状況との比較をめぐって、「入り乱れたドッジボール」のような？面白い議論が盛り上がった。

●1932 年 3 月「満州国」建国と石原莞爾の「王道楽土」

Reporter Mm：「満州」って何か？　やっぱり、日本が勝手にひとの国(中国)で満州国という国をたてて、都合のいい「五族（漢・満・蒙古・日本・朝鮮）協和」と「王道楽土」を理念にしたにすぎない。
　五族といったって、朝鮮は日本に「併合」の憂き目にあっていて、いわば日本の捨て石。
「王道楽土」とは、「(法華経の）王道に基づき治められる安楽な土地」。それは、宮沢賢治と同じく国柱会の熱心な信者で、「満州国」の立役者石原莞爾によれば、天皇が法華経の菩薩になった「東洋の王道」で人々が救済される理想社会を日本と「満州」で実現し、世界に広げること。
Uy：宮沢賢治をずっと読んできたが、国柱会の会員には結局ならなかったものの、彼の童話の底流には、法華経の思想が流れていると思う。実際、煩悩の数と同じ、108 の物語を書いている。
Yy：国柱会って、日本の国をどうにかするということで、「エリート」が会員だったみたい。
GO：「王道楽土」なんて、宮崎のアニメ「風の谷のナウシカ」でしか聞いたことがない。が、宮崎も「満州」のことを踏まえて、その「焦土・棄民」のイメージで、フクシマを予想させる放射能汚染の「ナウシカ」を描いたのかも。
N：それにしても、なんで天皇が菩薩なのか？
GO：明治維新で天皇を「発明」し、仏教を排斥して近代化・資本主義化を進めてきたが、「満州国」建国当時、「時代の閉塞感」が覆い、天皇制自体が機能しなくなる恐れがあり、「制度疲労」？を起こしていたので、「欧米の政治の基盤はキリスト教」と言われるのに対して、仏教の上に天皇を据えて再生を図ろうとした。実際、石原莞爾が日米戦争を予想した時の言い方は「仏法の東洋の王道日本と、キリスト教の西洋の覇者アメリカは、いずれ世界の幸福のための最終戦争を交えざるをえない。」

●当時の「国民」の意識

Mm：「満州ブーム」で、「満州」へ渡る人々は、ある者たちは「時代の閉塞感」から逃れるために、のちには、窮乏した農民たちが新しき土地を求め、また、財閥の「ドル買い占め」の裏で失望し「満州で一旗揚げよう」という、今

の「半グレ（暴力団のような組織に属さずに犯罪を繰り返すアメーバのような集団）」のような若者たちがいた。
　一方、そんな時代に、1930 年 11 月、「満州」で生まれ放浪した青年佐郷屋留雄が東京駅で濱口首相を暗殺。1932 年 2 月、血盟団が蔵相、財閥総帥を暗殺。1932 年 5 月、海軍たちが犬養首相を暗殺する 5.15 事件がたて続けに起こるが、共通しているのは、「天皇が何とかしてくれる」ということ。
GO：ただ、補足すれば、一方で、彼らは「資本主義社会はもうだめ」と「天皇制打倒」を掲げるマルクス主義者と同じことを考え、シンパシーもあった。それから、「第三章」後半でやるが、1930 年から 1934 年は敗戦前の「左派」労働運動・農民運動の最盛期でもあった。
Mm：それにしても、5.15 事件の青年将校たちの「政治や財界の腐敗を憂う心情」は当時の世間の同情を大変集めたようだ。
GO：「プロレタリア」という女工からも涙ながらの応援の投書もあった。
Mm：こういう当時の青年たちの見た社会と通底する今の格差社会をどう見るか。今は、投票率最低で選挙にも関心がない。
GO：確かに、当時、1925 年普通選挙法を勝ち取ってから、犬養首相が暗殺されるまでの選挙の投票率は一貫して約 90%。そういう比較で言えば、今がだめなのか？
Mg：そうとも言えない。当時、言われたようなテロ事件が相次いだのは、高い投票率でも変わらないというのがあったと思う。今は、ある意味、それをわかっているから、というのもあると思う。
Ys：いや、当時は、テロといっても、すべて、「天皇のおさめる社会」のためだった。
Uy：天皇には、自転車のチェーンに「遊び」がないとダメなように、今も、社会の「遊び」の機能があるのではないか。それがないと、社会がギスギス、殺伐とする。
GO：しかし、「天皇がおさめると皆が平等に癒され、幸せになる」というのは、自分で考えなくなる、自分たちで自分たちのことを決めることを奪うのでは？
Ks：自己決定権。今の日本は、日々、「何をしちゃだめ」とそれが狭められてきている。
Go：「殺伐とする」というより、いちいち意見を言い合うことが面倒かもしれないが。
Mg：いや、ある意味「殺伐」としなければ、革命もないんじゃないか。
Ys：「誰かに決めてもらおう」というのはあると思う。山本太郎自身がどうあれ、「れいわ新選組」が少し危険な感じがするという声もある。

N：敗戦前の戦争と同様に、オリンピックも「国が決めたから」という人が多いことが怖い。
Mk：一方で、今の「半グレ」は、「金持ちから金をとるからいい」と、自分たちを「義賊」だと言っている。

●「満州」侵略がもたらしたもの

Mm：もう一度、なんで「勝手に人の国へ」か！　「朝鮮人や中国人には自治ができなくてダメだから」という勝手な意識。そして、そうだからか、「満州国」建国時からは先になるが、敗戦時に、日本人の棄民・ソ連軍レイプ・シベリア抑留の一方で、踏み荒らされた中国民衆が日本人「残留孤児」を育てたにも関わらず、朝鮮人・中国人女性を「性奴隷！」以外の何物でもない「従軍慰安婦」にすることが「満州」から始められた。
GO：今、熱いので、次回プチ労で、特別番外編として、「慰安婦」・「徴用工」問題の歴史と現在をやりたい。否定する声も強く引き続く日本人の問題。
Yy：そもそも、朝鮮「併合」は、「朝鮮を豊かにした」という話もよくある。
N：さらに、その前の日清、日露に勝利したことはアジアのために「よかった」という。
Mk：「特攻」について、よく「青年たちの純粋な思い」と美化して振り返って終わり、というように、日本人は、「島国」で隔離され、単一民族で来たから、「起きてしまったことに（相手の立場に立って自己批判的に）アプローチすることが苦手」というのがあるのでは。
Mm：映画「永遠のゼロ」だ。
Mk：アメリカには、軍隊の士気高揚映画のパロディ SF 映画「スターシップトルーパー」(1998 年)のようなものもある。
GO：一方で、敗戦前は、今のように「単一民族論」よりも、朝鮮・「満州」と侵略していったからこそ、「日本人はもともと多民族だった」と言われていたらしい。あまり好きではないが、小熊英二という社会学者が解明した。
Ks：やっぱり、支配者が時々、都合のいい「説」をつくる。
GO：そして、敗戦直前に強制動員で朝鮮人が国内に急増したので、敗戦直後、「天皇の臣民」にした植民地人を「外国人」にして、「日本人はずっと単一民族だった」と変えたらしい。歴史が支配者に都合よく作られているんであれば、権威と権力ではない僕らなりに見直していくしかない。
Ys：自分の祖父は、予科練だったらしいが、あまり戦争自体の話はしなかった。
GO：次回の話になるが、「過去とよく対決している」と言われるドイツでも、

本格的に戦争の総括を始めたのは、1970 年前後の学生運動が戦争責任を追及してかららしい。政治家だけでなく親たちに問いかけた。しかし、僕は、父親が死ぬまで問いかけたことが一度もない。僕の父親も、軍慰安所を作ったことを自慢した元首相中曽根と同じく海軍主計中尉だったが、戦争について自分から語ることは一切なかった。
Mm：自分の父親は、よく戦友の会にも行って軍歌も唄う人だったが、それ以上、問いかけると怒った。
Yy：敗戦時に天皇が退位したり、彼の戦争責任が裁かれていれば、みんな、戦争のことを話したのかもしれない。
GO：そうかもしれない。やっぱり、天皇がカギになるのかな。確かに、ドイツでは、敗戦直後、まだ、ドイツ人一般が過去の戦争に向き合いたくなくても、イスラエルというユダヤ人の国ができ、ナチスという「悪者」がはっきりしていた。

　ほんと、「ドッジボール」というか、みんなの常識や知識や認識や思いが「押しくら饅頭」のように問いかけあっている感じ。次回の入り口の議論もできた。
　レポーターはじめ、みなさんありがとうございました♪
　次回 9 月 29 日プチ労は、番外編「『慰安婦』・『徴用工』問題の歴史と現在」です。
　よろしく。

以上

＜2019-10-27 プチ労 106 まとめ＞⇒別冊

＜2019-11-24 プチ労 107 まとめ＞
参加者：11 人（ドイツから一時帰国の Ms さん特別参加、幼児「フータのねーちゃん」1 名）
中高年：青年＝4：7　地域：それ以外＝5：6
メニュー：韓国労働者、民衆の闘いに敬意を表して
　　スンドウブチゲ（純豆腐鍋）、ニラと桜エビのジャン

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 18 回
第三章　1930 年代（世界大恐慌～日中戦争開始まで）
レポーターゆたかさん

第三章（３）朝鮮侵略が生んだ“矛盾の実験場”「満州」侵略
第四節　「総力戦」の準備—「満州産業開発計画」の失敗
第五節　棄てられる開拓移民
別紙補足：敗戦後日本の国家賠償裁判 - 戦争をなかったことにするか、しないか

「“持つ者が持たない者に持たせることをしない”という現代でも同じ発想のアベの祖父岸をはじめとした日本の支配層は、『満州国』という壮大な“ハリボテ”を使った“ママゴト”のために、中国・朝鮮の民衆を踏みにじり、日本人開拓移民を棄てたのに、学校で習う『満州国』の設立から滅亡は１行で済ませられて、自分の“嫌韓”にも通じている。自分の認識がどうできているか考えても、僕らはもっと伝えていかなければならない。」
詩人であるレポーターが「草稿」のところどころを朗読とまとめが
Excellent!!!
「言葉」がズーンと響いた。

第四節　「総力戦」の準備—「満州産業開発計画」の失敗

概説 GO：「満州産業開発計画」は、「農民の窮乏を救い王道楽土建設」など当初、勝手ながら青年将校石原莞爾らにあった「夢」はすぐに消え、「革新官僚」岸信介らが差配する「日本資本主義の延命」のための「統制経済」の実験になる。日本の国家予算の半分を使う計画の結果は大失敗だったが、岸らにより、この計画を模して国家総動員法体制が作られ、反省もなく敗戦後の高度成長体制に引き継がれる。
Reporter UU：石原らの意識の背景として、コラム「『軍国主義』の根本は農村の窮乏」に、「『軍国主義』は日本人の本姓に根差すものではない。農村の窮乏の拡大とともに『軍国主義化』も増大してきた。」とあり、当時の小作人をめぐる議論として「小作人の権利を伸長させることは働く意欲を一掃する」とか「そもそも貧窮者の大部分は遺伝である」とかあったようだが、“持つ者が持たない者に持たせることをしない”のは現代も同じ発想だ。ところで、“革新官僚”ってどういう意味かな？
GO：石原らの「夢」への共感もそうだが、1929 年世界恐慌で大失業時代になり、農村は窮乏し、明治以来の「近代化」のなかで蔓延していた「時代の閉塞感」があった。岸らのやったことは「上からの統制」でしかなかったけれど、何かそういう感じを吹っ切るように「明治以来の旧態依然を作り直す」というようなことが、「革新」だったのではないか。今も、多くの 10 代の人たちが「日本を取り戻す」というアベたちを「革新」とみているらしいこととも似て

いる。
UU :「満州」の「実験」を敗戦後に引き継いだという意味では、もうひとつのコラムにあるように新幹線。「計画」の初代委員長十河（そごう）は敗戦後国鉄総裁として、「満鉄を疾走していた特急をぜひ再現したい」と多数の戦死者を出した「日本の復興の証」1964 年東京オリンピックの前日に東海道新幹線を開通させた。しかし、無理な工事で多数の労働者が死んだ。開高健は、閉会式で黛敏郎作曲の梵鐘の電子音楽を聴きながら「得体のしれぬ暗愁の混沌において、ごううううおおおンと鳴り響くところへ『君が代』が演奏されるものだから、いよいよこちらは、おとむらい気分、陰々鬱々となっていく」と書いた。
　岸らは「壮大な実験」をした。でも、その「成果」は後の日本に「移築」するためで、「満州国」が巨大な「ハリボテ」だということはわかっていたのではないか。仮に戦争に勝利したとしても、人の国に勝手に国をつくったことの無理、自己矛盾を。

第五節　棄てられる開拓移民

概説 GO :「産業開発計画」と同時に、1937 年、日本政府は、日本の 5 反未満の零細農家の半分にあたる 100 万戸を「満州」に送り込む「開拓移民計画」を立て、1942 年までに、中国農民 3 千万人、日本統治でやむなく「満州」に行った朝鮮農民 100 万人超が営々と耕した農地の 6 割、日本の総面積の半分、「満州」総面積の 14%にあたる 2 千万㌶の土地を詐取した。しかし、「1 戸が 20 町歩」と宣伝され送り込まれた開拓団には技術と装備は追いつかず「成功した開拓団」は数少なく、食料増産の「計画」全体としても失敗だった。
そして、敗戦までに青少年義勇軍を含めて 27 万人送り込まれた開拓移民は、1945 年敗戦とともに置き去りにされ、1 年後にようやく始まる引き揚げまでに 8 万人が死亡。うち 7 万人が病死で、残り 1 万人のうち 3 千人以上が「集団自決」だった。
UU : こんなことがあったのに、学校で習う「満州国」の設立から滅亡というのは、ほぼ 1 行で済ませられる。

レポーター雑感「自分の認識はどう出来ているか」
UU : だから、自分にとって、「満州国」より朝鮮半島のほうがまだ近い気がする。そうはいっても、今まで、実際知り合った韓国人には何もないのに、「旅行したい国ではない」という意味で、なぜか「嫌韓」。どうしてか？　よくわからないが、最近あらためて知ったが、1987 年まで韓国が軍事政権だったからかな。

自分の認識がどう出来てきているかと考えると、最近は、たみとやでのいろんなやり取りで出来て、その前は、友人たちとのやり取りで出来ている気がする。
MM：私も、韓国への印象は、11 月の労働者集会に行って、韓国労組の人たちが大挙して来ているのを見て変わった。若い人は、やはり中国・韓国より、欧米へのアコガレ強いのかな。
N：逆に、プチ労では、若い人から反米という声も出た。
MG：反米というわけでもないが、例えば「韓流」などには興味がない。
MK：話は戻るが、「満州開拓移民」には、村ごと行ったのが多いというが、被差別部落ごと行ったのもあるんですかね？
GO：あるある。
MK：そのへんから、一層、日本の差別構造がつくられた面もある。
N：一方で、みんな開拓移民に行く中で、コラムにもあるように、長野県の佐々木村長のように移民を送り出すことを拒み続けた人がいたことを絶対覚えておくべき。
GO：そうそう、彼が拒み続けられたポイントは、妻の「身内を送り込めない場所ならやめておきなさい」という一言と若い時に通った山宣などが講師の「伊那自由大学」で学んだことだった。2018 年には、FNS 大賞のドキュメンタリー「満州移民に抵抗した村長佐々木忠綱」になったらしいが、敗戦後は、彼は、まず村になかった高校を作ったらしい。
UU：そういう意味でも、僕らはこういう歴史を伝えていくべきだと思う。

補足：敗戦後日本の国家賠償裁判 - 戦争をなかったことにするか、しないか

GO：置き去りにされた移民は敗戦後どうしたのか、ということで中国残留婦人国家賠償裁判があった。彼女たちは、置き去りにされたうえ、帰還事業を打ち切られ、戸籍を抹消されるなど 4 度も棄民されたうえで 2001 年に提訴し、日本政府の責任は認められたものの賠償請求は却下された。
戦争被害への国家賠償は、1955 年に提訴された「原爆裁判」で認められた。1963 年の判決は「アメリカの原爆投下が国際法違反」としながら、国際法は国と国との問題として請求を却下したが、「原爆投下は国際法違反」は、国際人道法の問題として 2017 年の核兵器廃絶条約につながった。
さらに、2019 年 11 月には、日本の国家賠償を求める韓国での「慰安婦」裁判が始まり、今、「国際法は国と国との問題」なのか「国際人道法」の問題なのかが日本政府に問われている。
この敗戦後の過程は、「戦争をなかったことにするのか、しないのか」のせめぎあい。

KS：日本は、アメリカとともに「戦争をかくそう、かくそう」としてきて「経済大国」になった。一方、たしかに、ドイツは、「反省。反省」とやってきたんだが、ある意味、「堂々」と再軍備して「大国」になった。ネオナチも復活している。
YS：「ナチスが悪い」ということが強かった？
GO：そうはいっても、ドイツ民衆レベルで「反省」が始まったのは、1960 年代学生運動が懸命に問いかけたからもある。それでも、ドイツも日本も反戦があらためて問われるのは、資本主義そのものに対する尊厳をかけた労働者・民衆の運動っていうことか。

次回 2020 年 1 月 26 日プチ労は、その意味でも、「満州国」を揺るがせ続けた中国民衆の抗日武装闘争と「満州侵略の兵站基地」朝鮮の労働者・農民の闘いを見ていきたい。
さらに、2 月以降は、第三章「草稿」後半ということで、1930 年代日本国内の労働運動と農民運動を見ていきたい。

以上

＜2020-1-26 プチ労 108 まとめ＞
参加者：9 人（スペインから帰国中の Hk さん、福島から Sn さん特別参加）
中高年：青年＝5：4　地域：それ以外＝4：5
メニュー：恒例ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ風肉味噌丼、タフ・ゴレン・サンバル(厚揚げとトマトの甘辛炒め)
完食御礼

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 19 回
第三章前半（1930 年代、世界大恐慌～日中戦争開始まで：ドイツ、アメリカ、「満州」）これまでの振り返り
レポーターGO

Reporter GO：
・レポーター(「草稿」筆者)にとって、「不気味なほど現代に似ている」(ナオミ・クライン)と言われる 1930 年代、「草稿」を書きながら「発見」の連続。
　ドイツ労働者階級の激しい闘いがナチスの台頭をギリギリまで食い止めたこと(2 月プチ労)、ナチスの台頭の主力が実は農民だったが、農民も「あと一歩」で労働者と連帯できたこと(4 月プチ労)、アメリカの労働者の激しい闘い

も資本主義体制を「崩壊の危機の淵」に追いつめ「ニューディール政策」を引き出したこと(6 月プチ労)、しかし、ナチスの反ユダヤ法のモデルになった！アメリカの人種差別法制・政策がギリギリで体制崩壊を食い止めたこと(5 月プチ労)、そして、「発見」というより、どこかさえ「知らなかった満州」。日本国内では時代の閉塞感と「天皇が何とかしてくれる」という意識がないまぜになったなかで「満州は希望だ」というブームが巻き起こり「満州」侵略を支えたこと。そして、中国・朝鮮民衆が 3 千万人もいた土地を踏みにじり、各政策が大失敗した上に日本人開拓移民を棄てたこと(7、8、11 月プチ労)。

＊別紙「振り返りメモ」PDF 版 1～8 頁参照

・そのなかで見えてきたことは、労働者・農民の激しい闘いが、絶えず、民族と人種の差別・分断政策・構造により、すくいとられようとして、戦争に向かっていったこと。

・各回の議論は、我々のいる現代日本がどうなのかを考える議論になったが、今も昔も変わらず、労働の尊厳を取り戻そうとすることと民族・人種差別との「せめぎあい」なのが、みんなの「珠玉」の発言・認識から、我々自身の問題として問われてきたとも思う。

・レポーターとしては、「振り返り」で、歴史を学んだ感想を聞かせてもらおうと思ったが、「歴史」初参加のお二人の積極的な発言もあり、単なる感想というより、それを超えて、「何で差別するのか」、差別を乗り越えるために「考える」とはどういうことか、「行動」つまり「考えるだろう」人とどう話しつながるのか、など、「せめぎあい」を乗り越える、今後「歴史」をやっていくうえで、いい切り口となる議論となった。

Mm：すべて「差別」！　ドイツがそうだし、アメリカは白人だけの「自由と民主主義」。日本にいたっては「満州」で完全に朝鮮人差別。嫌悪だ。

Hk：今のスペインでも、白人至上主義。私自身、南米にいたときには一切なかった差別、「Fucking China」と再三差別される。スペインは南米侵略したが、その後、ヨーロッパのなかでは貧しく劣等意識がある。特に 1970 年代までフランコ独裁政権だったことで、白人中心主義が強いのかも。社会主義圏としてつながりがあって、ベトナムや北朝鮮の移民が多かった東ドイツなどとも違い、最近増えてきた移民への差別が強い。

Mk：差別が生まれるのは、みんなが「考えない」、いろんな人のことを「考えるのがメンドクサイ」というのがあると思うが、それは、ある意味、長い人間の歴史からいえば、考えないで支配者に従う方が「生存確率が高まる」から。「考える」つまり「最も燃費が悪い、食料がたくさん必要になる」脳を使うのは「飢え死に」するし不効率だった。

Uy：しかし、考える方が面白い。
Mg：人は考えるもの。
Sn：「考えさせない」のは支配者の政策。福島では本当のことが「知らされず」分断されている。そのなかで、人々は、教えられなくても必死に知ろうとして考えようとしている。
Mk：今、それなりに食うものがあるなかで、まさに、考えるべき。
Mg：結論はまだないが、何で差別があるのか考えている。それは「自分はえらくなきゃ」と思うこと？　それはどこから？　人間はえらいはず？　資本主義が進むにつれ自然をわが物に出来るとおもってきたこと？　そうはいっても資本主義以前に農民が、エタ非人が差別もされていた。一方で、再開発反対をしている立石で、昼から飲んでいるおっちゃんは自分のこと「えらい」なんて全然思っていないし、気軽に誰とでも話す。解放されている。
Nk：我々が「考える」ように、「無関心」と見える人たちも「考えている」と思う。そう考えて、そういう人たちと、もっともっとつながる「行動」したい。
Mg：自分はなかなかできないが、つながるために、「おっちゃん」のように、もっと「腹を割って話す」必要がある。しかし、どうも途中で、「伝わるのか」とか、不安、あるいはアキラメみたいになることも多い。多くの人が、SNS 的な短い言葉、会話になりがちだからか。
Sn：香港の若者たちの闘いのなかから生まれた言葉として、リーダーを決めて従うのではなく、それぞれの流れが集まる？というような「水のように闘う」という言葉があるらしい。

(別紙「振り返りメモ」PDF 版の後半(9～15 頁)の「参考」は、「無関心とアキラメの海」に見える日本の多くの人たちの意識構造を分析しようとした論説を集めてみたもので、結論はありませんがご覧ください。次回プチ労は 2 月 23 日日曜日。しょうごさんのレポーターで「満州」最後の第 6 節「満州国」を揺るがせ続けた抗日武装闘争、第 7 節「満州侵略の兵站基地」朝鮮の労働者・農民の革命的な闘い)

以上

＜2020-2-23 プチ労 109 まとめ＞
参加者：10 人（うち 1 名スペインから帰国中の Hk さん）
中高年：青年＝4：6　地域：それ以外＝5：5
メニュー：恒例春のちらし寿司(鮭・穴子)

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 19 回
レポーターしょうごさん
第三章（３）朝鮮侵略が生んだ“矛盾の実験場”「満州」侵略
第 6 節　「満州国」を揺るがせ続ける抗日武装闘争
第 7 節　「満州侵略の兵站基地」朝鮮の労働者・民衆の革命的な闘い

レポーターが、統計や地図、「集団部落」の図も使い、「満州」・朝鮮の当時の民衆闘争の資料は日本ではなかなか少ないなかで、独自の資料も探して、作ったくれた秀逸なレポートは、衝撃的で、そのポイント、以下 2 点は、わかりやすく、説得力があった。

「草稿」でも伝えたかった点で、「満州」最後のいいまとめになったと思う。

① 「『満州国』は、武力弾圧と監視なしには一日たりとも存在し得なかった」（「草稿」）どころか、膨大な資金も必要となり、実質、「国」として維持できていなかった。
② 当時の朝鮮では、労働運動と農民運動を中心とする独自の革命運動が、プロレタリア国際運動のはざまで、翻弄されながらも、言葉も名前も奪い文化も破壊しようとする日本に対して抵抗運動を懸命に継続し、日本敗戦後の朝鮮の解放へと歩んでいった。

Reporter YS：まず、「満州」では、「満州事変」以前にいろいろ闘いがあった。

特に、朝鮮との国境地域、延辺地域（間島：カンド）では、ロシア極東地域に移住した朝鮮族経由でマルクス主義思想が拡散されていた下地もあった。

1930 年に起こった 5.30 間島蜂起では、暴動が、実に 680 回にも達した。

1931 年、「満州事変」が起こると、東北部では、各種の抗日義勇軍が結成され、その数、20-30 万人にも拡大した。

日本は、討伐と治安対策が課題となり、住民 3 千人を虐殺する平頂山事件も起こしたが、民衆に支援された抗日闘争は維持されたために、民衆と抗日勢力の分断のために、保甲制度と集団部落を導入。

保甲制度は、農家 10 戸を単位に身分証をもたせ連帯責任をとらせる制度で、565 万戸が組織された。

集団部落は、100 戸を単位に、在来の村から移住させ、新たに部落を作り、周囲に 2.5m の堀を立て溝を掘り、四隅に砲台を設け、自警団を組織させて昼夜監視するもの。1935 年度から 1172 か所、1938 年には 1 万か所を超えて増加。

こんなにまでして、治安工作をしたが、膨大な経費が必要となり、国防治安費は、予算の 4 割に達した。
「草稿」には、「『満州国』は、武力弾圧と監視なしには一日たりとも存在し得なかった」とあるが、それどころか、膨大な資金も必要となり、実質、「国」として維持できていなかった。
N：うーん、すごい！　今まで、「満州」では、棄民された日本人開拓移民を含めて、民衆は、やられっぱなしかと思ったが、やっぱり、民衆の闘いがこんなにすごかったんだ。希望をもらえた。
GO：「集団部落」は、アメリカが、ベトナム戦争でまねして、1961 年で、南ベトナム人口の 7 割、930 万人を 7500 か所の「戦略村」に移住させて、ベトコンなどとの分断をはかったが、負けた。
MM：「集団部落」から、支援するだけじゃなくて、抗日武装闘争に加わる人たちも多くいたんだろうか？
GO：監視が厳しくて、また、関東軍は、抗日戦力へ渡るのを恐れてせっかくの収穫も焼き払うなどして、なかなか、部落から加わるのは難しかったが、敗戦後の「慰安婦」裁判では、部落から加わって捕らえられ「慰安婦」にされた女性もいたと思う。

Reporter YS：次に、当時の朝鮮は、「満州」の「兵站基地」にされ、その総動員のために、精神面では、創氏改名・皇民化教育・弾圧を強めた。
創氏改名は、単に日本風の名前にすることではなく、結婚しても女性の姓は変わらず、子供が父方の姓になるという、血統を基礎とする儒教的家族制度のありかただった朝鮮人に新たに氏を創設させ、日本の家制度に変更させるという、伝統文化そのものを破壊する行為だった。
一方、兵站を強化するため、朝鮮北部の重工業化を行い、農業生産を工業生産が上回り、労働者が増えて労働運動が一段と盛んになるとともに、農業の基盤と生活を破壊される農民運動も北部中心に盛り上がった。
1920 年代に結成された民族解放運動の統一戦線、新幹会(シンガカイ)は、日本の弾圧のなかで、次第に改良主義的な限界を示し解散に至り、朝鮮共産党は、激しい弾圧のなかで分派に分裂し、コミンテルンからも、「満州」共産党と日本共産党の支部になることを指令されて壊滅する。
それでも、労働運動と農民運動が独自の革命運動を懸命に継続し、日本敗戦後の朝鮮の解放へと歩んでいく。
朝鮮新報によれば、農民組合運動は、「実践活動が地域密着で行われ、貧農階級や青年女性の活動家が多く輩出され、そのことがさらに運動を活発なものにしていった。」

一方、抗日闘争を一層押しすすめただろう朝鮮共産党の壊滅については、敗戦後の金日成(キムイルソン)はソ連が送り込んだ別の人物という説もあるが、抗日闘争で名を馳せた金日成が国際共産主義運動の問題と限界について語った言葉がある。

「分派はドイツやソ連にもあったし、中国や日本にも、コミンテルンのなかにもあった。なぜひとり、朝鮮人だけが分派的な習慣を気質として持っている民族とみなされなければならないのか。」

GO：ほんとに、コミンテルンの指図にも翻弄されても、朝鮮の労働運動と農民運動は、日本の弾圧で「地下化」しながら、粘り強かったようだ。日本の敗戦 8 月 15 日から、朝鮮では、2 週間足らずの 8 月末までに、朝鮮半島全域で 145 か所の人民委員会ができて、各地方の治安と行政権を掌握し、人民共和国が、一旦つくられる。それをなしとげたのは、戦時下から続く労働運動と農民運動の力だった。その後、あせったアメリカにつぶされるが、当時の日本と比べてみても、すごい！
KS：「満州」の抗日運動と朝鮮の労働運動、農民運動との関連は？
Reporter YS：「満州」抗日運動の主力は、朝鮮人だった。それに敬意を表して、今の中国に朝鮮自治区が置かれている。
MG：まず朝鮮が日本に併合されて抵抗運動がおこり、次に日本が「満州」を侵略して、抗日闘争が起こった。
MM：創氏改名がそういうことだったのは知らなかった。ほんとに文化を壊そうとしたんだ。
一同：そうだ。
GO：日本は、名前とともに、朝鮮半島中に咲きみだれる「国花」、無窮花（ムグンファ、日本では、むくげ：木槿）まで切り倒して、桜を植えた。
Hk,YY,As：えーっ！！
GO：イギリスの植民地インドでも、フランスの植民地アルジェリアでも、名前まで制度的に変えることはなかったんじゃないか。
UY：そうだな。チンギスハンでさえ、占領した民族の文化を尊重した。
N：奴隷にした黒人をアフリカの文化も名前も断ち切って西欧風の名前にしたアメリカを除けば。

次回 3 月 29 日プチ労 110 回から、第三章後半「1930 年代日本の労働運動、農民運動」で、新たに「草稿」配布して概説します。資料代 300 円お願します。

以上